

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

和仏法律学校講義録

下村, 宏 / 遠藤, 忠次 / 鶴見, 守義 / 和仁, 貞吉

(出版者 / Publisher)

和仏法律學校

(巻 / Volume)

2-21

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

51

(発行年 / Year)

1902-09-10

和佛法律學校講義錄

和佛法律學校發行

第貳拾壹號

三十五年度 第二學年

(明治三十九年十一月九日第三種郵便物認可 每月一回)

發行

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3

第二學年第二十一號目次

商法會社(元) (自一四五至二七五)

表紙及目次

八頁

法學士 和仁貞吉

民事訴訟法第二編(自三四一至四四八)

法學士 遠藤忠次

刑事訴訟法(自二〇五至二二二)

法學士 鶴見守義

財政學(自一九三至二四三)

法學士 下村宏

雜報

○數罪俱發例ニ依ル判決中ノ一罪ニ對スル控訴○第一審公判ニ於

ケル開席判決手續

090
1902
2-1-21

返還ヲ請求スルコトヲ得第一九五條、民法第四二三條參照)

損失ヲ填補シ且法定ノ準備金ヲ控除シタル残額ハ會社カ自由ニ處分シ得ル所ノ金額ナリ會社ハ或ハ其一部ヲ任意ノ準備金トシテ積立テ或ハ之ヲ以テ社債ヲ償還シ又成ハ其全部ヲ株主間に配當スルコトヲ得其配當ハ定款ニ依リテ拂込ミタル株金額ノ割合ニ應シテ爲スヲ原則トス是レ最モ公平ヲ得タルモノナリ然レトモ會社カ優先株ヲ發行シタル場合ニ於テ優先株主ニ對レ特別ノ利益ヲ與フルコトヲ得ルハ論ヲ缺タス(第一九七條商法第一百九十七條ニハ利益ノ配當ノ外利息ノ配當ニ關スル規定アリ茲ニ所謂利息トハ外國法ノ建築利息ヲ謂フモノニシテ會社カ設立ノ登記ヲ爲シタル後開業スルニ至ルマテノ間ニ於テ株主ニ與フル所ノ株金ニ對スル一定ノ利息ナリ夫會社ノ目的タル事業ノ性質ニ依リ開業ヲ爲スニ至ルマテ長年月ヲ要スルモノニ在リテハ開業前ニ於テ未タ株主ニ配當スヘキ利益ナルモノ之ナキヲ以テ株主ハ株金ヲ拂込ミナカラ之ニ對スル利息ヲモ受クルコト能ハス之カ爲メ自然此ノ如キ會社ヲ設立セントスルモ甘シテ其株式ヲ引受タル者ナキニ至ルヘシ故ニ運河築港鐵道等ノ如

第二學年第二十一號目次

商 法 會 社 (元) (自二四五至二七五)

美原及ロ日次 八頁

法學士 和 仁 貞 吉
法學士 達 藤 忠 次

民事訴訟法第二編 (自二四八)

法學士 達 藤 忠 次

刑 事 訴 訟 法 (自二一〇至二二三)

法學士 下 村 宏

財 政 學 (自二九三)

法學士 下 村 宏

刑 事 訴 訟 法 (自二一〇至二二三)

法學士 下 村 宏

雜 報

○敵匪俱發例ニ依ル判決中ノ一罪ヲ罰スル控訴○第二審公判ニ於ケル開席判決手續

090
1902
2-1-21

返還ヲ請求スルコトヲ得第一九五條、民法第四二三條参照)

損失ヲ填補シ且法定ノ準備金ヲ控除シタル残額ハ會社カ自由ニ處分シ得ル所ノ金額ナリ會社ハ或ハ其一部ヲ任意ノ準備金トシテ積立ヲ或ハ之ヲ以テ社債ヲ償還シ又成ハ其全部ヲ株主間に配當スルコトヲ得其配當當ハ定款ニ依リテ拂込ミタル株金額ノ割合ニ應シテ爲スヲ原則トス是レ最モ公平ヲ得タルモノナリ然レトモ會社カ優先株ヲ發行シタル場合ニ於テ優先株主ニ對シ特別ノ利益ヲ與フルコトヲ得ルハ論ヲ缺タス(第一九七條)商法第九百九十七條ニハ利益ノ配當ノ外利息ノ配當ニ關スル規定アリ茲ニ所謂利息トハ外國法ノ建築利息ヲ謂フモノニシテ會社カ設立ノ登記ヲ爲シタル後開業スルニ至ルマテノ間ニ於テ株主ニ與フル所ノ株金ニ對スル一定ノ利息ナリ夫レ會社ノ目的タル事業ノ性質ニ依リ開業ヲ爲スニ至ルマテ長年月ヲ要スルモノニ在リテハ開業前ニ於テ未タ株主ニ配當スヘキ利益ナルモノ之ナキヲ以テ株主ハ株金ヲ拂込ミナカラ之ニ對スル利息ヲモ受クルト能ハス之カ爲メ自然此ノ如キ會社ヲ設立エントルモ甘シテ其株式ヲ引受タル者ナキニ至ルヘシ故ニ運河築港鐵道等ノ如

ク容易ニ開業スルコトヲ得タル事業ヲ目的本スル會社ニ限り定期ヲ以テ開業ヲ爲スニ至ルマテ一定ノ利息ヲ株主ニ配當スヘキコトヲ定ムルコトヲ許スバ實際上大ニ必要トスル所ナリ其利率ハ法定利率ヲ超ユルコトヲ得ス且利息配當ノ規定ハ裁判所ノ認可ヲ受クルヲ要ス是レ利息ノ配當ハ往往機構ノ媒介ヲ爲スノ處アレハナリ利息ノ配當モ亦利益ノ配當ト同シク定期ニ依リテ拂込ミタル株金額ノ割合ニ應シテ爲スヘキモノトス但優先株ヲ發行シタルトキバ此限ニ在ラス(第一九六條第一九七條)以上説明スルカ如ク會社ノ計算ヲ爲ス者ハ取締役ニシテ之ヲ監視スル者ハ監査役ナリ故ニ監査役ノ設置アルトキハ業務ヲ執行及ヒ財產ノ管理ミ付キ取締役フシテ不正若クハ不注意ノ行爲ナカラシムルコトヲ得ルカ如シト雖モ株式會社ノ事業ハ繁雜錯綜ニシテ往往監査役ト雖モ其實況ヲ洞見スルコトヲ得テルコトアルノミナラス又時トシテハ取締役ト結托シテ共ニ不正ヲ謀ルコトナシトセス其弊害ヲ防クカ爲メニハ監査役ノ外別ニ嚴正ナル方法ヲ設クル必要アリ監査役ノ選任及ヒ裁判所ノ干渉是ナリ商法第百九十八條ノ規定ニ依レハ

資本ノ十分ノ一以上ニ當ル株主ハ會社ノ業務及ヒ會社財產ノ狀況ヲ調査セシムル爲メ監査役ノ選任ヲ裁判所ニ請求スルコトヲ得検査役ハ其職務ヲ行フニ付キ必要ナル一切ノ行爲ヲ爲ス權限ヲ有ス會社ノ金庫ヲ開キテ現在ノ金額ヲ調ヘ帳簿又ハ書類ヲ検査シ取締役監査役其他ノ役員ニ對シテ説明ヲ求ムルカ如キハ固ヨリ其爲シ得ル事項ナリトス調査結了シタルトキハ検査役ハ其結果ヲ裁判所ニ報告スルヲ要ス裁判所ハ其報告ニ依リ必要アリト認ヌタルトキハ適當ノ處分ヲ爲シシムルカ爲メ監査役シテ株主總會ノ招集ヲ爲シシムルコトヲ得(第一九八條)

第六章 社債

會社ハ一箇人ト同シク事業ノ成績ニ依リ負債ヲ爲ス必要ニ遭遇スルコトアリ其方法ハ或ハ一部ノ大資本家ヨリ爲スコトアリト雖モ通常其金額頗ル大ナルカ故ニ一箇人ヨリ負債ヲ爲スコト少ク法律ノ許シタル特別ノ方法ニ依リ廣タ公衆ヨリ之ヲ爲スモノトス此特別ノ方法ヲ社債ノ募集ト謂フ社債ノ募集ハ會

社カ負債ヲ爲ス所ノ方法ニシテ社債ハ會社ニ對スル純然タル債權ナリ隨テ體債ノ募集ハ決シテ會社ノ資本ヲ增加スル方法ニ非ス舊商法第二百六條カ之ヲ以テ資本ノ増加方法ト爲シタルハ會社ノ資本ト會社ノ財産トヲ混同シタル不論理ノ規定ナリ

社債ト株式トハ相類似スル點アルモ其性質ハ全ク異ナレタ株式ハ株主カ會社ニ對スル權利ニシテ社債ハ第三者カ會社ニ對スル債權ナリ二者類似ノ點ヲ舉

クレハ左ノ如シ

一、社債ハ自由ニ譲渡スコトヲ得
二、債券ハ其全額ノ拂込アリタルトキ無記名式ト爲スコトヲ得
株式ト社債トノ異ナル要點ヲ舉クレハ左ノ如シ
一、株主ハ社債権者ニ辨済シタル後ニ非サレハ會社財產ノ分配ヲ受クルコトヲ得ス(第二三四條、第九五條參照)
二、株主カ配當ヲ受クル所ノ利益ハ年度ニ依リ差異アレトモ社債権者ハ常ニ一定ノ利息ヲ受クル

三、社債ノ辨済ハ會社ノ義務ナルモ株金ノ拂戻ハ通則トシテ禁セラバ
四、株主ハ會社ノ業務ニ參與スル權利ヲ有スルモ社債権者ハ此權利ヲ有セ
(一) 社債ヲ募集スルニハ左記ノ方法及ヒ制限ニ依ルコトヲ要ス
是レ社債ノ募集ハ定款ノ變更ニ非ナルモ會社ノ事業ニ重要ナル關係ヲ有スルコト定款ノ變更ニ劣ル
所ナシ故ニ定款ノ變更ニ要スル特別決議ヲ要ス(第一九九條)
(二) 社債ノ總額ハ拂込ミタル株金額ニ超ユルコトヲ得ス又最終ノ貸借對照表ニ依リ會社ニ現存スル財產カ拂込ミタル金額ニ満タルトキハ其財產ノ額ニ超ユルコトヲ得ス是レ社債ニ對スル擔保ヲ確實ナラシムルト會社ラシテ
濫ニ社債ヲ募集スルコトヲ爲シヌタル爲メノ規定ナリ(第二〇〇條)
(三) 社債ノ金額ハ二十圓ヲ下ルコトヲ得ス(第二〇一條)
(四) 社債権者ニ償還スヘキ金額カ券面額ニ超ユルコトヲ定メタルトキハ其金額ハ各社債ニ付キ同一ナルヲ要ス(第二〇二條)是レ濫ニ各社債ニ付キ償還

金額ヲ異ニスルコトヲ許ストキハ富義ニ類スル賭事ヲ公行スルニ至リ公室ヲ害スル憂アルカ故ナリ金融及商業等に關する事項を於てはイサム其会社

(五) 取締役ハ左ノ事項ヲ公告スルコトヲ要ス(第二〇三條)

一、第百七十三條第三號乃至第六號ニ掲ケタル事項(第一〇二〇条)

二、會社ノ商號

三、前ニ社債ヲ募集シタルトキハ其債還ヲ了ヘサル總額をもれ此額を過

四、社債發行ノ價額又ハ其最低價額

五、會社ノ資本及ヒ拂込ミタル株金ノ總額

六、最終ノ貸借對照表ニ依リ會社ニ現存スル財產ノ額を定め利潤更ニ後

社債ノ募集力完了シタルトキハ取締役ハ各社債ニ付キ其全額ヲ拂込マシムルコトヲ要ス蓋シ社債ハ會社ノ事業ヲ經營スルニ當リ必要アル場合ニ於テノミニ募集スルモノナルカ故ニ其募集完了シタルトキ社債ノ全額ヲ拂込マシムルハ至當ナリ(第二〇四條第一項)但書ハセバ此後再び同種の債券を發行する事取締役カ社債全額ノ拂込ヲ受ケタルトキハ其日ヨリ二週間内ニ本店及ヒ支店

ノ所在地ニ於テ社債ノ總額各社債ノ金額社債利率社債償還ノ方法及ヒ期限ヲ登記スルコトヲ要ス(第二〇四條第二項)但書ハセバ此後再び同種の債券を發行する事社債ハ會社ニ對スル貸主の權利ナリ此權利ハ純然タル一人の債権ナルカ故ニ他人ニ譲渡スル不得ルコト他ノ債権ト異ナルコトナシ然レドモ其債権ハ譲渡ヲシテ容易ナラシムルハ社債ヲ募集スル上ニ於テノミナラス一般ノ經濟上ニ於テモ甚タ便宜トスル所ナリ是ヲ以テ法律ハ株式ノ譲渡ヲ容易ナラシムルカ爲ス株券ノ發行ヲ認メタルト同一ノ趣旨ニ依リ社債ノ譲渡ヲ容易ナラシムルカ爲メ債券ノ發行ヲ認メタリ債券ハ社債權者ノ權利ヲ表彰スル所ノ證書ナリ債券ニハ第二百三條第一號及ヒ第二號ニ掲ケタル事項及ヒ番號ヲ記載シ取締役之署名スルコトヲ要ス(第二〇五條)

債券ニハ記名式ノモノト無記名式ノ記名式ノ債券ハ社債ノ金額ノ全部カ拂込マレタルトキ社債權者ノ請求ニ因リ無記名式ト爲スコトヲ得(第二〇七條)前項前句ニ該據す且其丸音を點綴スル處難易可視せらば之後該據會社債ノ譲渡ニ付テハ株式ノ譲渡ニ關スル同一ノ法則適用セラル即チ無記名社

債ノ讓渡ハ合意ノミニ因リテ效力ヲ生ス當ニ記名社債ノ讓渡ハ讓受人ノ氏名、住所ヲ社債原簿ニ記載シ且其氏名ヲ債券ニ記載スルニ非ナレハ之ヲ以テ會社其他ノ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス第二〇六條
第二百八條ニ定款ハ株主總會ノ決議ニ依リテノミ之ヲ變更スルコトヲ得ト規定セルハ即チ此意ナリ財政監査官ヘ亦同様也
何ナル場合ニ於テモ定款ヲ變更スル能ヲ有スルコトナシ故ニ定款又ハ株主總會ノ決議ヲ以テ取締役又ハ監查役ニ定款變更ノ權ヲ與フルモ其効力シ商法第二百八條ニ定款ハ株主總會ノ決議ニ依リテノミ之ヲ變更スルコトヲ得ト規定セルハ即チ此意ナリ財政監査官ヘ亦同様也
株主總會ニ於テ定款ヲ變更スルニハ普通ノ決議方法ニ依ルコトヲ許サス必ス
總株主ノ半數以上ニシテ資本ノ半額以上ニ當ル株主出席シ其議決權人過半數ヲ以テ決セサルヘカラス是レ法律ノ命スル所ナリ然レトモ定款ニ於テ之ニ反スル規定ヲ爲スモ妨ト爲ラス唯其規定ハ議決ノ方法ヲ法律ノ命スル所ヨリモ

一層重カラシムルコトヲ得ルニ止マリ之ヲ輕減スルコトヲ得ス例へハ或事異ニ限リ總株主ノ同意ヲ必要トスルコトヲ規定スルカ如シ此ノ如ク定款ヲ變更スルニバ一定ノ員數ノ株主出席スルコトヲ必要トスレトモ時トシナシトモ種種ノ事情ノ爲メ其定數株主ノ出席ヲ得ル能ハナルコトアリ斯ル場合ニハ實際定款ヲ變更スルニ於テ大ナル利益アルニ拘ハラス定員ノ出席ヲ得サルカ爲メ之ヲ斷行スル能ハスシテ會社ノ不利益ヲ護スルコトナシトセス此點ニ付キ法律ヲ以テ便宜ノ規定ヲ設タルコトハ最モ必要トスル所ナリ商法第二百九條第二項ノ規定ニ依レハ定員ノ株主出席セサルトキハ其出席シタル株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ假決議ヲ爲スコトヲ得此決議ハ固ヨリ一時ノ決議ニシテ直ナニ其效力ヲ生スルモノニ非ス故ニ之ヲシテ有效ノ決議カラシムルカ爲メ會社ハ各株主ニ對シテ假決議ノ趣旨ノ通知ヲ發シ且無記名式ノ株券ヲ發行シタルトキハ其越百ヲ公告シ更ニ一箇月ヲ下ラサル期間内ニ第二回ノ株主總會ヲ招集スルコトヲ要ス而シテ第二回ノ株主總會ニ於テハ出席シタル株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ假決議ヲ認可スル否ヤア決定ス之ヲ認可スル決議ヲ爲シタルト

資本ノ増減はナリ會社ノ資本ハ會社ノ事業ニ大ナル關係ヲ有スルモノニシテ
其額ハ定款ニ依リテ一定期スルニ増減ハ重要ナル定款ノ變更ニシテ且法律ヲ
以テ其手續ヲ一定スルニ非サレハ許可又ハ授機ヲ行ハルル處アリ是レ法律ニ
此點ニ關シ特ニ規定ヲ爲シタル所以ナリトス左ニ之ヲ説明スヘシヤモリト
第一 資本ヲ増加スル時ニ於テ資本ノ額或ハ此額又ハ又ハ資本ヲ
資本ヲ増加スルコトハ會社ノ事業ヲ擴張スルカ爲メニ行ハルルヲ通常トス然
レトモ其他ノ目的ノ爲メニ行ハルルコト亦敢テ稀ナリトセ故例ハム社債ヲ返
還スルカ爲メ資本ヲ増加スルカ如シヨリナシ也ト夫ハ類主ニ賣出ノ資本ノ額
資本ノ増加ハ何時ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得ルヤ商法第二百十條ノ規定ニ依レ
ハ資本ハ株金全額拂込ノ後ニ非サレハ資本ヲ増加スルコトヲ得ス蓋シ會社カ
資本ヲ増加スルハ之ニ依リテ事業ノ經營ニ必要ナル資金ヲ得シハ爲ナレハ
其増加ノ必要ハ株金全額ノ拂込以前ニ於テ之ヲ感スルコトアルニ拘ハラス先
ツ株金ノ未清ニ属スルモノヲ拂込マシメ其後資本ヲ増加スル事敢テ迴避シセ
ツ加之未タ株金全額ノ拂込ナキ以前ニ於テ資本ノ増加ヲ許ヌトキハ往往其上

依リテ社運ノ隆盛ヲ裝ヒ株式ノ價額ヲ騰貴セジメ其間不正ノ利益ヲ貪ラント
スルカ如キ弊害ヲ生スルコトナシトセビ是ニ法律カ此制限ヲ設ケタル所以ナ
リ計取、本家へ本家全般に亘る財産ニ於キ之を以て之を償へば此の外に余り大
商法カ資本増加ノ方法トシテ認ムルモノハ新株ヲ募集スル一方法アルノミ故
ニ會社ハ其他ノ方法ニ依リテ資本ヲ増加スルコトヲ得ス舊商法ニ於テハ新株
ノ募集ノ外株金ノ増加ヲ以テ資本増加ノ方法ト爲シタリ然レトモ是レ不逕ノ
甚シキモノニシテ法律上決シテ許容スヘキモノニ非ス夫レ株主ノ責任ノ有限
ナルハ株式會社ノ本質ナリ株主ハ其引受ヶ又ハ譲受ヶタル株式ノ數ニ應シテ
會社ニ對シ株金ヲ拂込ムノ外他ニ何等ノ義務ヲ負フコトナシ然ルニ株主總會
ニ於テ資本増加ノ方法トシテ株金ノ増額ヲ決議シ株主ニシテ其引受ヶ又ハ譲
受タタル株式ノ金額以外ニ金額ヲ拂込ハシムルハ株主ノ責任有限ナリトノ原
則ニ抵觸スルモノニシテ之ヲ許ストキハ株式會社ノ本質ヲ破ルニ至ルシ新
商法カ此規定ヲ廢シタルハ顏ケ當ラ得タルヨソナリ

新株ノ募集ニ付テハ會社ノ設立ニ關スル規定ト殆ト同一趣旨ノ規定カ適用セ

ラルト雖モ其最モ異オル所ハ新株ヲ募集スルニ當リ優先株ノ發行ヲ爲シ得ル
コト是ナリ優先株ハ普通ノ株式ニ比シ優等ノ權利ヲ包有スル所ノ株式ヲ謂
ヒ其株主ヲ優先株主ト稱ス其優等ノ權利ハ定款ニ依リテ定マルヘキモノナレ
トモ普通見ル所ノモ又ハ殘餘財產ノ分配ニ付テ他ノ株主ニ優
先スル權利ナリ新株ヲ募集スルニ當リ優先株ヲ發行スルハ之ニ依リテ其募集
ヲ容易ナラシメ以テ資本ノ増加ヲ爲シントスル詳在リ優先株ノ發行セ之ヲ定
款ニ記載スルコトヲ要ス(第二一一條)

新株ノ募集ニ付テハ世上一般ノ者ハ固ヨリ株主ト雖モ之ニ應スルコトヲ得
新株ニ付キ第百二十九條ノ拂込アリタルトキハ取締役ハ遲滞ナク株主總會ヲ
招集シテ之ニ新株ノ募集ニ關スル事項ヲ報告シ監査役ハ(一)新株總數ノ引受
ヲタルヤ否(二)各新株ニ付キ第百二十九條ノ拂込アリタルヤ否(三)金錢以外
ノ財產ヲ以テ出資ノ目的ト爲シタル者アルトキハ其財產ニ對シテ與フル株式
ヲ數ノ正當ナルヤ否(四)調査シ之ヲ株主總會ニ報告スルコトヲ要ス株主總會
ハ此等ノ調査及ヒ報告ヲ爲シムル爲シ時ニ検査役ヲ選任スルコトヲ得又株

新株ノ舊株ト同一ノ性質ヲ有スルモノナレハ之ヲ支配スル法律ノ規定モ亦同
一ナリ例へハ株式引受人ノ拂込義務其申込ノ取消、株主ノ責任株式ノ金額株券
ノ發行、株式ノ譲渡等ニ關スル規定ノ如シ但新株ノ株券ニハ本店ノ所在地ニ於
テ登記ヲ爲シタル年月日ヲ記載シ優先株ノ株券ニハ其株主ノ權利ヲ記載スル
コトヲ要ス第二一八條第一一九條第二一七條第二項

第二項 資本ノ減少ハ會社財産ノ減少計同一ノ意義ヲ有スルモノニ非ス資本の減少ハ
資本ノ減少ハ會社財産ノ減少計同一ノ意義ヲ有スルモノニ非ス資本の減少ハ

種種ノ目的ノ爲ニ行ハル或ハ事業ノ範囲ヲ減縮スル結果シテ多額ノ資本ヲ要セタルニ至リタルカ爲メ之ヲ爲スコトアリ或ハ連年損失ヲ被リ之ヲ填補スル能ガオル場合ニ於テ其損失ヲ係ル額タケ資本ヲ減スルヨコトアリ而シテ後ノ目的ノ爲メニ資本ヲ減スルコト最モ多々行ハル所ナリトス蓋シ株主ハ利益ノ配當ヲ得ンカ爲ス株式ヲ引受ケ又ハ之ヲ譲受タルモノナレハ損失ヲ填補スルマテ少シモ利益ノ配當ヲ受タルコトヲ得ストセハ勢ヒ多クノ株主ノ離散スルコトヲ免ルル能ハス故ニ其損失額タケ資本ヲ減少シ翌年度ヨリ利益ノ配當ヲ爲スコト會社ヲ維持スル上ニ於テ最モ策ノ得タルモノナリトス資本ノ減少ハ資本ノ増加難異ナシ之ヲ爲スコトヲ得ル時期ニ付キ法律上ノ制限ナシ故ニ會社ハ何時ニテモ資本ノ減少ヲ爲スコトヲ得然レトモ資本ノ減少ハ畢竟會社債権者ノ利益ヲ害スルモノナルカ故ニ之ヲ爲スニ付テハ必ス會社債権者ノ承諾ヲ得ルコトヲ要ス此點ニ付テハ後ニ説明スヘン資本ヲ減少スル方法ニ付テモ亦法律上の制限ナシ故ニ會社ハ其選フ所ノ方法ニ從ヒテ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其方法ノ如何ニ依リ株主ノ利害ナム大抵

關係アルヲ以テ株主總會於テ資本減少ノ決議ヲ爲ストキハ之上同時ニ其減少ノ方法ヲ議決スルコトヲ要矣(第二〇條普通資本減少ノ方法トシテ行ハルモノ三アリ)。但ヘモモニ要ス此種ニ付てハ餘に別題有ヘズ。

(一) 株式ノ金額ヲ減少スルコト。唯其金額ノミヲ減少スルモノナリ例ヘハ百圓ノ株金ヲ減シテ五十圓ト爲ス。又如ニ此方法ニ依ルモ株金額ヲ減シテ法定ノ額以下ニ至ラシタルコトヲ得ス。此方法ニモ亦三種アリ。

(二) 株金ノ全額カ未タ拂込サレタル場合ニ於テ其未拂三馬スル金額ノ拂込ヘモヲ免除シ以テ株金額ヲ減少スルコト。又株主ノ資本額ヲ減シテ株主ノ資本額以下ニ至ラシタルコトヲ得ス。

(三) 株金ノ全額カ既ニ拂込アレタル場合ニ於テ其一部ヲ拂戻シ以テ株金額ノ目ヲ減スルコト。本モ諸々ニテ並ニ通セテ此種ニシテ拂戻モ株主ヘ歸ス。

(四) 會社カ損失ニ依リ財産ヲ減シタル場合ニ於テ其現在ノ財産額ヲ以テ資本額ト爲シ之ニシテ株式ノ金額ヲ減少スルコト。此等大々要スニ及ぶる資本

(二) 株式ノ數ヲ減スルコト。此ハ事業ノ範圍之類擴大シ財産も之を通じ資本

此方法ハ株式メ金額ヲ減少セシムテ株式ノ數ノミヲ減少スルモノナリ例ヘハ千株アリシモノヲ五百株ト爲ス。又如シ普通行ハルモノハ株式ノ償却是ナリ。會社ハ株式ヲ償却スルコトヲ得ナルヲ以テ原則ト取引ト。資本減少ノ規定ニ從フトキハ之ヲ爲シ得ルコト第百五十一條第二項ノ規定スル所ナリ。株式ノ償却トハ株金額ヲ株主ニ拂戻シ以テ株式ヲ消滅セシムルモノニシテ畢竟一部ノ株主ヲ會社ヨリ脱退セシムル方法ナリ。而シテ之ヲ爲スニハ抽籤ニ依リ其償却スキ。株式ヲ定め會社ノ財産ヲ以テ株金額ヲ株主ニ拂戻。又商法第百五十一條第一項ニハ會社ハ自己ノ株式ヲ取得スルコトヲ得ナル。規定アリ故ニ會社カ自ラ資本金ヲ以テ市場價格ニ從ヒ株式ヲ買收シ以テ株式ノ償却ヲ爲スコトハ我商法ノ認ヌナル所ナリ。解セタルヘカラス。又資本減額セシムル時其會社ハ其決議ノ日ヨリ二週間内ニ財產目錄及ヒ債借對照表ヲ作リ其債權者ニ對シ異議アリハ一定期間内

第八章 解散

一、存立時期ノ満了其他定款ニ定タル事由ノ發生
二、會社ノ目的タル事業ノ成功又ハ其成功ノ不能不達成
三、株主總會ノ決議
四、會社ノ合併
五、株主カ七人未滿三減シタルコト

六、破產

七、裁判所ノ命令

八、會社カ解散ノ決議及ヒ合併ノ決議ヲ為スニハ定款變更ノ規定ニ從フコトヲ要
(ス第二二二條)

會社カ合併ヲ為サント欲スルトキハ其旨ヲ公告シテ株主總會ノ會日前一箇月
内ノ期間及ヒ開會中記名株ノ譲渡ヲ停止スルコトヲ得テ株主總會ニ於テ合併
ヲ決議ヲ為シタルトキハ其決議ノ日ヨリ本店ノ所在地ニ於テ登記ヲ為スマテ
ハ株主ハ其記名株ノ譲渡ヲ為スコトヲ得ス是レ皆株主ノ變更ヨリ生スル不便
ハ避ケンカ為メノ規定ナリ無記名株ノ譲渡ヲ禁セザルハ其譲渡ノ容易ニシテ

何時譲渡サレタルカヲ後日ニ決定スルコト甚々困難シテ禁止ノ規定ヲ爲ス
モ其實效ナキカ故ナリ(第二二三條)。通知ヲ發シ且記名式ノ株券ヲ發行シタル場合ニ於テ當之ヲ公告スル事トヲ要
會社カ解散シタルトキハ破産ノ場合ヲ除ク外取締役の遲滞ナク株主ニ對シ其
通知ヲ發シ且記名式ノ株券ヲ發行シタル場合ニ於テ當之ヲ公告スル事トヲ要
ス(第二二四條)。此他株式會社ノ解散ニハ合名會社ノ解散ニ關スル規定ヲ準用ス(第二二五條)

第九章 溶算

株式會社ノ清算ニ關スル法理ハ合名會社ノ清算ニ關スル法理ト同一ナルヲ以
テ茲ニ再ヒ之ヲ詳論セス。
株式會社ハ解散ニ因リ營業能力ヲ喪失スルモ清算ノ目的ノ範圍内ニ於テハ尙
ホ存續スルモノト看做ナルカ故ニ會社ノ機關及ヒ株主ノ權利義務モ亦清算
ノ目的ノ範圍内ニ於テハ尙ホ存續スルモノナリ唯取締役ハ營業上ノ機關ニシ
テ解散後其用ナキモノナルヲ以テ此機關ハ解散ニ因リテ全ク消滅ス之ニ代リ

之會社ヲ代表シ會社ノ事務ヲ執行スル者ヲ清算人トス清算人ニハ取締役ニ關
スル多クノ規定カ適用セラルトモ營業ニ關スル規定ハ固リ之ヲ適用セス
例ヘハ競業禁止ノ規定ノ如シ(第三三四條第八四條第一五九條第一六〇條第一
六三條第一七六條第一項第一七八條候一八三條乃至第一八五條第一八七條參
照)。合名會社及ヒ合資會社ニ在リテハ必ス法定ノ清算手續ヲ爲スヲ要セス定款又
ハ總社員ノ同意ヲ以テ會社財產ノ處分方法ヲ定ムルヲ得ルコト商法第八十五
條ニ規定スル所ナレトモ此規定ハ株式會社ノ清算ニ準用セラレバカ故ニ株
式會社ニ在リテハ必ス法定ノ清算手續ニ依ルコトヲ要ス。但此規定ハ
株式會社カ解散シタルトキハ合併及ヒ破産ノ場合ヲ除クノ外取締役其清算人
ト爲ルコト原則ナリ但定款ニ別段ノ定アルトキ又ハ株主總會ニ於テ他人ヲ選
任シタルトキハ此限ニ在ラス而シテ此等ノ方法ニ依ルモ尙ホ清算人タビ若ナ
キ場合ニ於テハ裁判所ハ利害關係人ノ請求ニ因リ清算人ヲ選任ス(第二二六條)
株主總會ニ於テ選任シタル清算人ハ何時ニテモ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ解

任スルコトヲ得又重要な事由アルトキハ裁判所ハ監査役又ハ資本ノ十分ノ
一以上ニ當ル株主ノ請求ニ因リ清算人ヲ解任スルコトヲ得(第二二一八條)
清算人ノ職務ハ現務ノ終了、債權ノ取立並ニ債務ノ辨済及ヒ残餘財産ノ分配是
ナリ而シテ之ヲ爲スニハ會社財產ノ狀況ヲ明カニスル必要アリ故ニ清算人ハ
就職ノ後遲滞ナク會社財產ノ現況ヲ調査シ財產目錄及び貸借對照表ヲ作リ之
ヲ株主總會ニ提出シテ其承認ヲ求メ且其承認ヲ得タルトキハ貸借對照表ヲ公
告スルコトヲ要ス株主總會ハ特ニ検査役ヲ選任シテ此等ノ書類ノ調査ヲ爲シ
シムルコトヲ得(第二二七條第一八五條第二項第一九二條第二項參照)〔八十
又清算人ハ就職ノ日ヨリ二箇月内ニ少タドモ三箇月内ニ公告ヲ以テ債權者ニ對シ
二箇月ヲ下ラナル一定ノ期間内ニ其請求ノ申出ヲ爲スヘキ旨ヲ催告スルコト
ヲ要ス而シテ其公告ニハ債權者カ其期間内ニ申出ヲ爲サナルトキハ其債權ハ
清算ヨリ除外スラルヘキ旨ヲ附記セサルヘカラス此公告ヲ爲シタルニ拘ハラ
ス債權ノ申出ナキトキハ清算人ハ其債權ヲ除外スルコトヲ得然レトモ此公告
ハ債權者ヲ知ルコトヲ以テ目的トスルモノナルカ故ニ總合之ニ從ヒ債權ノ申

出ヲ爲ナツル事年清算人ニ知ビタル債權者ハ之ヲ除外スルコトヲ得ス且清算人
ニ知ビタル債權者ニ各別ニ其申出ヲ催告スルコトヲ要ス申出期間後ニ申出
テタル債權者ハ會社債務完済ノ後未タ株主ニ引渡ガサル財產ニ對シテノミ
請求ヲ爲スコトヲ得(第二三四條民法第七九條第八〇條參照)〔大要〕
清算人ハ會社財產ヲ以テ先ツ會社ノ債權者ニ辨済ヲ爲シタル後ホ非ナヒハ之
ヲ株主ニ配當スルコトヲ得ス而シテ之ヲ爲スニハ定款ニ依リテ拂込ミタル株
金額ノ割合ニ應テ之ヲ株主ニ分配ス然レトモ會社カ優先株ヲ發行シタル場合
合ニ於テ之ニ異ナリタル定アルトキハ此限ニ在ラス(第二二九條)
清算事務カ終了シタルトキハ清算人ハ遲滞ナク決算報告書ヲ作リ之ヲ株主總
會ニ提出シテ其承認又求メサルカニス此場合ニ於テ株主總會ハ其書類ノ當
否ヲ調査セシムル爲メ特ニ検査役ヲ選任スルコトヲ得而シテ株主總會ニ於テ
承認ヲ與ヘタル事キ清算人ハ其決算ニ付キ不正有行爲ナキ限り解除セラル
(第二三一〇條、第二五八條第三項前二項三條參照)〔大要〕
總會招集ノ手續又或其決議ノ方法カ法令又或定款並反スル事無ハ清算人ハ必

ス其決議無効ノ宣告ヲ請求セナルヘカラス茲ニ所謂總會ノ決議ハ清算事務ニ關シテ招集セラレタル株主總會ノ決議ヲ謂フ株主ハ固ヨリ此總會ノ決議ニ對シ一箇月内ニ無効宣告ヲ請求ヲ爲スコトヲ得ルモ清算事務ハ速ニ終了セシムヘキ必要アルヲ以テ一箇月内ニ果シテ株主ヨリ請求ヲ爲スヤ否ヤヲ待フコト能ハス是レ法律カ清算人ニ其義務ヲ命シタル所以ナリトス(第二三一條第一六三條參照)

會社カ事業ニ着手シタル後其設立ノ無効ナルコトヲ發見シタルトキハ解散ノ場合ニ準シテ清算ヲ爲スコトヲ要求此場合ニハ裁判所ハ利害關係人ノ請求は因リ清算人ヲ選任ス(第二三二條)清算人ニ付託ス(第二三三條)清算人ニ付託ス(第二三四條)清算人ニ付託ス(第二三五條)清算人ニ付託ス(第二三七條)清算人ニ付託ス(第二三九條)乃至第九三條第九五條第九七條第九九條參照)

第四編 株式合資會社

株式合資會社ハ無限責任社員ト株主トヨリ組織スル所ノ商事會社ナリ此會社ハ合資會社ノ一種トシテ認メラルト雖モ其經濟上ノ效用及ヒ法律上ノ形式ハ最モ株式會社ニ類似ス是ヲ以テ商法ニ於テハ株式合資會社ニ關スル規定中無限責任社員ニ關スルモノニ付テハ合資會社ニ關スル規定ヲ準用シ其他ノ點ニ付テハ特別ノ規定ナキ限り總テ株式會社ニ關スル規定ヲ準用セリ(第二三六條故ニ合資會社及ヒ株式會社ニ關スル規定ヲ明カニスレハ株式合資會社ニ關スル規定ハ自ラ明カナルヘシ左ニ株式合資會社ニ特別ナル規定ニ付テ略説スベシ

株式合資會社ハ合資會社及ヒ株式會社ノ各長所ヲ採リテ設定セラレタルモノニシテ特種ノ技能ヲ有スル少數ノ者カ多數ノ資產家ヲ集メテ大事業ヲ經營スルニ最モ適當ナル組織ナリ此會社ノ無限責任社員ハ合資會社ノ無限責任社員ト概モ同一ノ關係ニ於テ會社及ヒ第三者ニ對立シ株主ハ又株式會社ノ株主ト

略ホ同一ノ地位ヲ有ス無限責任社員ノ出資或金錢其他ノ財產大半ト者ト普通ナ
ルモ又株式ヲ引受タルコトヲ得タルニ非ヌ然ニモ株式ヲ引受ケタルカ爲其
其責任有限ト爲ルモノニ非ス唯其引受タタル株式ニ付テハ他ノ株主ト同様人
權利ヲ有スルコト更得ル入ミ株主會社ハ各其運営大半を執掌セラム然ハ
第一 標式合資會社ノ設立ハ定款ノ確定ヲ以テ始シ創立總會人終結ヲ以テ終化登
記ヲ爲スニ非サレハ其設立ヲ以テ第三者ニ對抗スルコトヲ得タルハ他ノ會社
ト異ナルコトナシ無限責任社員ハ先ツ發起人トシテ定款ヲ作り株主ヲ募集セ
サルハカラス其定款ニ記載スルキ事項ハ株式會社ノ場合ト拂ホ同一ナリ其株
主募集ノ方法並亦同シ而シテ株式總數ノ引受及ヒ第一回ヲ拂込アリタビトキ
ハ發起人ハ創立總會ヲ招集シ監查役ヲ選任ス此場合ニ取締役ノ選任ヲ爲サエ
ビハ無限責任社員ハ自ラ監査役ト爲ルコト得ス是レ株式會社ニ於テ取締役
ト監査役トノ職務ヲ嚴ニ區分シ取締役ヲシテ監査役ト爲ルコトヲ許サナルト
同一ノ精神ニ基キ畢竟職務ノ性質相反スルニ由ルモノナリ又無限責任社員ハ

創立總會ニ出席シテ意見ヲ述フルコトヲ得ルモ議決ヲ數々加ハルヨトヲ得ス
自ラ株式ヲ引受ケタルトキト雖モ亦同シテ發起人ハ監査役ト監査役ハ
監査役ハ第一百三十四條第一項及ヒ第二百三十七條第四號ニ掲タル事項ヲ調
査シ之ヲ創立總會ニ報告スルコトヲ要ス此場合ニ第一百三十四條第二項ハ株式
合資會社ニ準用セラレナルヲ以テ創立總會ハ特ニ以上ノ事項ヲ調查キシムル
爲メ監査役ヲ選任スルコトヲ得ス創立總會ニ於テ定款ノ變更又ハ設立ノ廢止
ヲ決議スルコトヲ得ルコト及ヒ創立總會ノ終結ニ因リテ會社成立スルコト株
式會社ノ場合ト異ナルス會社ハ創立總會終結ノ日ヨリ二週間内ニ本店及ヒ支
店ノ所在地ニ於テ設立ノ登記ヲ爲サルハカラス其事項ハ第二百四十二條ニ
掲ケタリ
第二 機關
株式合資會社ニハ株式會社ト同シク三箇ノ機關アリ其一ハ無限責任社員其二
ハ監査役其三ハ株主總會ナリ無限責任社員ハ會社ノ業務ヲ執行シ會社ヲ代表
スル上ニ於テ取締役ト大差ナシ然レトモ總テノ無限責任社員カ常ニ業務執行

ニ當ラシムルコト合資會社ノ場合ト異ナル此ノ如ク業務執行社員及ヒ代表社員ヲ特ニ選定スルトキハ他ノ無限責任社員ハ固ヨリ其權能ヲ失フモノトス業務執行社員及ヒ代表社員ノ員數及ヒ任期ニ付テハ取締役ノ如ク法律上ノ制限ナシ又此等ノ社員ハ法律上當然報酬ヲ受クルコトヲ得ス然レトモ定款ヲ以テ利益配當ノ際特別ノ利益ヲ與フルコトハ爲シ得サル所ニ非ス此無限責任社員ハ競業禁止ノ義務ヲ負フコト合資會社ノ無限責任社員ト相同シ監査役ハ業務ノ執行及ヒ會社財産ノ狀況ヲ監督シ併セテ株主總會ノ決議ヲ實行セシムルコトヲ以テ其職務トス業務及ヒ財產監督ノ點ニ於テハ株式會社ニ於ケル監査役ト異ナルコトナキモ株主總會ノ決議ノ實行ヲ以テ其職務トスルコト大ニ異ナル所ノ要點ナリ蓋シ株式會社ニ於テハ株主總會ノ決議ハ取締役之ヲ實行スヘキモノナレトモ株式合資會社ニ於テハ無限責任社員ト株主ト相對時シ株主總會ノ決議ハ株主ノミノ意思ヲ發表スルニ過キシシテ社員全體ノ意思ヲ發表スルモノニ非サルヲ以テ業務執行ノ任ニ在ル無限責任社員ハ必ス

シモ之ニ福東セラルヘキモノニ非ノ故ニ株主総會ノ決議ヲ實行セント御事ナ
先ツ無限責任社員ノ同意ヲ得ル必要アリ而シテ其同意ヲ求メテ之ヲ實行セシ
ムルカ為ニハ監査役ヲシテ其任ニ當ラシムアルコト適當ナリトス是レ株式合
資會社ニ此特別ノ規定ヲ設ケタル所以ナリ此取扱事項又は株主総會
株主總會ハ株主ヲ以テ組織スル所ノ合議體ニシテ無限責任社員ハ之ニ出席シ
テ意見ヲ述フルコトヲ得ルニ止マリ決議ノ數ニ加ハルコトヲ得ス故ニ此總會
ノ決議ハ單ニ株主ノ意見ヲ發表スルニ過キサルコト前述スルカ如シ株主總會
ノ招集決議ノ方法等ハ株式會社ノ場合ト同シ

株式合資會社ハ合資會社同二ノ事由ニ因リテ解散ス但會社ヨリ解散ヲ裁判所ニ請求スルコトハ此會社ニ於テ認メナル所ナリ此會社ハ無限責任社員ト株主トヨリ成ルモノナルカ故ニ無限責任社員ノ全員カ退社シタルトキハ會社ハ之ニ因リテ解散セサルヘカラス然レントモ此場合ニ於テ餘ノ株主カ株式會社トシテ之ヲ繼續センコトヲ欲スルトキハ敢テ理論ニ拘泥シテ解散ヲ爲ナシム

ノコトナク株式會社トシテ之ヲ繼續セシムルニト實際上甚^タ便利ナリ唯株式會社ニハ自ラ其組織ニ必要ナル事項アルヲ以テ株主ハ繼續ノ決議ヲ爲スト同時ニ株式會社ノ組織ニ必要ナル事項ヲモ併セテ決議セサルヘカラス其決議ハ第二百九條ノ規定ニ依ルコトヲ要ス株式會社ノ組織ニ必要ナル事項トハ例ヘ取締役ノ選任其有スヘキ株式ノ數イ如シ此繼續ノ決議ヲ爲シタルトキベ二週間内ニ本店及ヒ支店ノ所在地ニ於テ株式合資會社ニ付テハ解散ノ登記ヲ爲シ株式會社ニ付テハ設立ノ登記ヲ爲シト要ス

第四清算 株主へ算取、資本大半ニ歛チテ、商取入ハシテ、株主總會
清算ニ付テハ株式會社ノ規定準用セラルルヲ以テ詳説セス其異ナシモノヲ舉クレハ會社カ解散シタルトキハ合併、破産又ハ裁判所ノ命令ニ依リテ解散シタ
場合ノ外清算ハ無限責任社員ノ全員又ハ其選任シタル者及ヒ株主總會ニ於テ選任シタル者之ヲ爲ス株主總會ニ於テ選任スル清算人ハ無限責任社員ノ全員若クハ其相續人又ハ其選任セル者ト同數ナルコトヲ要スルコト是ナリ是レ
株式合資會社ニテハ無限責任社員ト株主ト相對峙シテ利害ヲ異ニスルコトア

ルカ故ニ清算ヲシテ兩者ノ爲メ公平ナル結果ヲ得セシメントスル法意ニ出ツルナリ

第五 組織ノ變更

株式合資會社ハ株主總會ノ決議及ヒ無限責任社員ノ一致アルトキハ其組織ヲ變シテ株式會社ト爲スコトヲ得是レ實際上ノ便宜ヲ計リタル規定ニシテ此會社ニノミ特別ナルモノナリ此場合ニ於テハ株主總會ヲ開キテ株式會社ノ組織ニ必要ナル事項ヲ決議スルコトヲ要ス此會社組織ノ變更ハ會社債權者ノ利害ニ大ナル關係アルヲ以テ會社ハ合併ノ場合ニ準シ其變更決議ノ日ヨリ二週間内ニ財產目錄及ヒ貸借對照表ヲ作り債權者ニ對シテ變更ノ承諾ヲ求メ承諾セナル者ニ對シテハ辨済ヲ爲シ又ハ相當ノ擔保ヲ供スルコトヲ要ス

商法會社終

商法會社

法學士和仁貞吉講述

(三十五年度講義錄)

卷一百一十一

商法合集

第一章 合名會社
合名會社
和佛法律學校發行

商法會社

味勝書學社發行

哲學士 味 壽 貞 吉 藏 鑑

(昭二十五年九月五日)

商法會社目次

總論	會社之性質、會社之設立、會社之財產、會社之責任、會社之解散、會社之清算、會社之合規、會社之監督	一〇
第一章 會社之定義	一	一
第二章 會社之種類	二	一八
第三章 會社之設立	三	二二
第四節 定款ノ作成	四	二三
第五節 設立ノ登記	五	二七
第六節 設立ノ義務	六	二九
第七節 設立行為ノ性質	七	三一
第八章 會社ノ住所	八	三五
第九章 會社ノ營業	九	三九
第一編 合名會社	一〇	三九
第一章 合名會社ノ意義	一一	三九

第二章 合名會社ノ設立	四六
第三章 社員	五五
第一節 社員タル資格ノ喪失	五七
第二節 會社ノ資產	六三
第四章 會社ノ法律關係	六九
第五章 會社ノ法律關係	七一
第一節 會社ノ内部ノ關係	七二
第二節 會員ノ義務	七三
第六章 第一項 出資	八〇
第七章 第二項 業務の執行	八九
第八章 第三項 繙業の禁止	九四
第九章 第二款 社員の權利	九四
第十章 第一項 會社の機關ニ干與スル權利	九四
第十一章 第二項 會社財產の分配ヲ受クル權利	一〇一

第二節 會社ノ外部ノ關係	一一一
第一款 會社の代表	一一一
第二款 社員の義務	一六
第六章 解散	二二〇
第一節 解散の原因	二二三
第二節 第一款 存立時期ノ満了其他定款ニ定メタル事由	一四六
第三節 會員ノ同意	二二三
第三款 會社ノ目的タル事業ノ成功又ハ其成功ノ不能	一四七
第四款 會社の合併	一二四
第五款 社員が一人ト爲タルコト	一二五
第六款 財産	一二五
第七款 執行判決	一二三

第二節 解散及登記

一三五

第七章 清算

一三五

第一節 法定清算

一三九

第二款 清算人ノ選任及ヒ解任

一四〇

第三款 清算人ノ職務

一四三

第四章 會社ノ書類ノ保存

一四七

第五章 合資會社ノ意義

一四九

第六章 合資會社ノ設立

一五〇

第七章 會社人法律關係

一五二

第一節 内部ノ關係

一五一

第二節 外部ノ關係

一五五

第八章 株式會社

一五六

第九章 有限公司

一五六

第十章 有限公司ノ解散及ヒ清算

一五六

第三編 株式會社

一五九

第一章 株式會社ノ意義

一五九

第二章 株式會社ノ設立

一六三

第三節 總論

一六五

第四節 同時設立

一七〇

第五節 漸次設立

一七七

第六節 株式

一九六

第七章 株主ノ權利義務

一九六

第八章 株券

二〇四

第九章 株式之得喪

二〇九

第十章 株主ノ權利

二二三

第十一章 株主ノ義務

二二八

第四章 會社ノ機關

第一節 株主總會

二二二

第二節 取締役

二二八

第三節 監査役

二三六

第五章 會社ノ計算

二四〇

第六章 社債

二四七

第七章 定款ノ變更

二五二

第八章 解散

二六四

第九章 清算

二六九

第四編 株式合資會社

二七五

第一章 一般

二八一

第二章 會社

二八五

第三章 會社員

二九九

第四章 會社員

三〇三

第五章 會社員

三〇七

第六章 會社員

三一一

第七章 會社員

三一五

第八章 會社員

三一九

第九章 會社員

三二三

第十章 會社員

三二七

第十一章 會社員

三三一

第十二章 會社員

三三五

ラス四チ判決ノ理由ハ確定力ヲ有スヘカラナルナリ故ニ履行ノ請求ニ訴訟ニ於テ其原因タル法律關係ノ存否ニ付テモ確定力ヲ生スヘキ判決ヲ得ントスルトキハ第二百十一條ノ規定ニ從ヒ特ニ其法律關係ノ存否確定ノ申立て爲シ判決主文ニ於テ其點ノ裁判ヲ受ケタルヘカラス又判決ノ理由中ニ爲サレタル以證若クハ防禦ノ方法其他係争事實ニ關スル判断ハ同シク確定力ヲ有スルモノ非サルナリ但判決主文ニ於テ裁判セラレタル事項ノ果シテ如何ナル法律關係ニ關スルモノナルヤリ知ルニハ固ヨリ判決ニ掲ケタル事實及ヒ理由ヲ參照スルノ必要アリ故ニ若シ主文ノヨリ以テハ何レノ法律關係ニ基ク請求ノ裁判ナルヤリ知ルコト能ハサル場合ノ如キモ判決ノ事實及ヒ理由ニ依リテ或特定ノ法律關係ニ基ク請求ニ付テノ裁判ナルコトヲ知リ得ルトキハ其特定ノ請求ノ裁判トシテ確定力ヲ有スルモノトセサルヘカラス

右判決ノ實質上ノ確定力ハ本案ノ請求ニ關シテ生スルモノナルヲ以テ本案ノ請求ニ付キ裁判ヲ爲サヌシテ形式上ノ理由ニ基キ訴テ却下シタル判決ハ之ヲ有セナルコト勿論ナリ

官ガセニイリ

第一二款 判決ノ種別

審事ニ付半額第一百三十條第一項但書ニ依テ審事ノ権限不可レキモ民法ノ三百四十九条第一項終局判決トハ各審級ニ於テ訴訟ノ全部若クハ一分ナ裁判ヲ爲スニ熟セルトキニ爲スヘキ判決ニシテ其訴訟ノ全部若クハ一分ナ終局ヲ告ケシムルモノナリ（第三二五條訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキトハ必スシモ各攻撃若クハ防衛ノ方法其他總テノ係争事實ニ付ニ判断又爲スコトヲ得ルニ至リタル場合ノミテ謂フニ非スシテ例へ原告若クハ被告ノ提出シタル數多ノ獨立ナル攻撃若クハ防衛ノ中其一箇ニ依テ直チニ請求ノ當否ヲ裁判スルニ足ルトキハ未タ他ノ攻撃防禦ノ方法ノ當否ヲ判断スル材料ヲ得カルトキト雖モ仍ホ訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟セルモノト謂フコトニ得其他係争事實ノ真否分明ナラサル訴訟ノ程度ニ在リテモ形式上ノ理由ニ基キテ訴訟ヲ却下スヘキ場合又ヘ原告カ請求ヲ拠棄シ或ハ被告カ原告ノ請求ヲ認諾シタルニ因リテ直チニ裁判ヲ爲シ得ヘキ場合モ亦同シ此等ノ場合ニ裁判所カ一旦終局判決ヲ爲シタルトキハ訴訟ハ

其裁判所ヨリ離脱シ其後ハ唯上級審ヨリ差戻ヲ受ケタルトキニ於テ再ヒ其訴ノ繁属スルコトアルノミ十八號百六十二通入該款ニ付シ一人答々人一人終局判決ハ必スシモ本案ノ請求即チ實體上ノ權利ニ付テ爲シタルモノノミテ謂フニ非ス苟モ訴訟ノ全部若クハ一分ノ終局ヲ告ケシムルモノハ請求権ノ實質ニ付テ下シタルモノナド形式上ノ理由ニ基キテ下シタルモノオルトア開ハス總テ之ヲ終局判決ト謂ガナルヘカラヌ故ニ訴訟ノ必要條件ヲ缺クノ理由ヲ以テ訴ヲ却下スル判決、故障又ハ控訴、上告ヲ不適法トシテ棄却スル判決ノ如キモ之ニ因リテ其訴訟ハ終局ヲ告タルモノナルヲ以テ是ビ亦終局判決ナリトス控訴審ニ於テ第四百二十二條第四百二十三條ノ規定ニ依リ事件ヲ第一審裁判所ニ差戻ス判決ハ終局判決ナルキ又ヘ中間判決ナガメノ問題ニ付テハ學者謂ニ於テ議論一定セス我民事訴訟法ノ解釋ナシテハ難ナル問題ニ屬スルモ右差戻ノ判決ハ其性質上ヨリ論スレハ寧ロ終局判決ニ屬スルモノナリトスルヲ至當ト信ス何トナレハ該判決ハ終局判決ノ準備トシテ爲スモソニ非スシヲ之ニ依リテ其訴訟事件ハ直チニ控訴審ヲ離脱シ同審ニ於テハ全ク終局ヲ

告タルモノナルヲ以テナラヘリトニ對照審査調査ニ付セハ全般的熟識爲スヲ得ルモノナリ故ニ全部判決ト一分判決トノ區別ハ終局判決ノ細別ニ過キス全部判決トハ一箇ノ訴訟ノ全部カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦其一部分ニ付キ爲ス所ノ判決ナリ裁判所カ第百二十條ノ規定ニ依リテ同時ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲ス爲ミニ數箇ノ訴訟ヲ併合シタル場合ニ於テモ其中一箇ノ訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟セルトキハ亦其訴訟ニ付キ終局判決ヲ爲スヘキモノナリ(第二二五條第二項)此場合ハ裁判所ノ併合審理ノ手續上ヨリ觀レハ其一部分ノミカ完結シタルニ過キナルヲ以テ一分判決ナルカ如キ觀アルモ其一箇ノ訴訟ニ付テハ全部ニ亘リテ判決ヲ爲スモノナルヲ以テ是レ亦全部判決ナリ一分判決ト云訴訟ノ一分カ裁判ヲ爲スニ熟セルトキ其一分ニ付キ爲ス所ノ判決ナリ訴訟ノ一分ニ付キ判決ヲ爲ストハ第四十八條第百九十一條ノ規定ニ從ヒ一人若クハ數人ノ原告ヨリ一人若クハ數人ノ被告ニ對シ一人訴ヲ以テ數箇ノ請求ヲ爲シタル場

合ニ其中ノ一二ノ請求ニ付キ又ハ一箇ノ可分ノ請求ノ一部ニ付キ又ハ反訴ノ提起アリタル場合ニ本訴若クハ反訴ミニ付キ判決ヲ爲スコ謂フ(第二二六條第一項右ノ如ク訴訟ノ一分ニ付キ數次ニ一分判決ヲ爲シタルトキハ各判決ハ其訴訟ノ一分ヲ終局セシムルヲ以テ全部判決ト同様ニ之ニ對シテ獨立ノ上訴ヲ爲スコトヲ得ヘク隨テ其各判決ハ獨立シテ確定力ヲ得ルニ至ル一分判決ハ必ス之ヲ爲スコトヲ要スルモノニ非ス縦合請求ノ一部カ裁判ヲ爲スニ熟スルモ裁判所ニ於テ事件ノ状況ニ從ヒ一分判決ヲ爲スヲ相當ト認メナルトキハ之ヲ爲スニ及ハサルモノナリ(第二二六條第二項)前項但書ニ付キ第一項但書ニ付キ事項ニ屬ス蓋シ法律カ中間判決ヲ爲スコトヲ許スハ通常當事者スル準備トシテ訴訟ニ於ケル或争點ニ關シテ爲ス所ノ判決ナリ故ニ中間判決ノ目的ト爲ル事項ハ若シ其判決ヲ爲サナルトキハ終局判決ノ理由中ニ於テ判斷ヲ爲スヘキ事項ニ屬ス蓋シ法律カ中間判決ヲ爲スコトヲ許スハ通常當事者カ種種ノ獨立ナル攻撃方法又ハ防禦方法ヲ提出シタルトキ又ハ中間ノ争ツ生

ヲ避ケ容易ニ其終局ニ達スルコトヲ得セシメンカ爲メナレハ果シテ中間判決ヲ爲スノ利便アルヤ否ナノ判定ハ原則トシテニ裁判所ノ意見ニ任シ必ス之ヲ爲スヘキコトヲ命令ヒス隨テ裁判所ハ便宜ニ從ヒテ中間判決ヲ爲スノ權能ヲ有スルノミニシテ其義務アルモノニ非ス唯例外トシテ既ニ説明シタル第二百七條ニ於テ妨訴ノ抗辯ヲ棄却スヘキ場合及ヒ第三百五十一條ノ規定ニ於テ證書ノ真否確定ノ申立アリタル場合ニハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ命スルノミ

テ主張シタル場合ノ如キロ頭辯論ニ於テ先ツ其一箇ノ方法不當ナルトヨ
認ムルヲ得ルニ至リ其點ノ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ爲スコトヲ
得ルモノナリ而シテ此ノ如ク當事者カ數多ノ攻撃方法又ハ防禦方法ヲ提出シ
タル場合ニ於テハ先ツ其一二ニ限リテ辯論ヲ爲サシムルコトヲ得ルハ第百十
九條ノ規定スル所ナリ但辯論ノ制限ハ中間判決ヲ爲スノ必要條件ニ非ス
中間ノ争トハ訴訟進行ノ中間ニ於テ其訴訟ニ付キ生シタル形式上ノ争シテ
決定ヲ以テ裁判エヘカラツルモノノ謂フ例へハ訴ノ變更ノ有無ニ付テノ争訴
ノ取下ノ適法ナルヤ否ヤ付テノ争ノ如キ是ナリ頭辯論中ニ斯ル争ヲ生シ
タルトキハ必ス終局判決ノ理由ニ於テ其當否ノ判断ヲ爲サザハカラツルハ
實體上ノ攻撃防禦方法ヲ提出シタル場合ト同一ナリ故ニ此場合ニ於テセ終局
判決ヲ爲スニ先テ特ニ其爭點ニ關シ中間判決ヲ爲スコトヲ得ルモノナリ勿論
右争點ノ判斷ニ因リテ直ニ訴ヲ却下スル終局判決ヲ爲スヘキトキハ中間判決
ヲ爲スノ餘地ナク其反對ノ場合ニ於テノミ終局判決ヲ爲スノ準備トシテ先
ツ中間判決ヲ爲スコトヲ得ベキナリ而シテ從參加人ト當事者トノ間ニ生シタル

ル参加ノ當否ニ付テノ争證人ト当事者トノ間ニ於ケル證言拒絶ノ當否ニ付テ
ノ争ノ如キハ第五十七條及ヒ第三百一條ノ規定ニ依リ何レモ皆決定ヲ以テ裁
判スヘキモノニシテ茲ニ所謂中間ノ争トシテ中間判決ヲ爲スヘカラナルモノ
ナリミ其ノ欲する其權限ニ相應する事無ニ

以上ノ説明ニ依リテ之ヲ觀レハ第二百七條第二項ニ規定セバ妨訴ノ抗辯ヲ棄
却スル判決ハ中間判決ニ屬スルコト疑ヲ容ルヘカラス此他妨訴ノ抗辯ニ關ス
ル判決ニ付テハ前ニ説明セシラ以テ茲ニ贅言スル必要ナキモ請求ノ原因ニ關
スル判決ニ付テハ少シク説明セサルヘカラス即チ第二百二十八條第一項ニ曰
ク請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ先シ其原因ニ付キ裁判ヲ
爲スコトヲ得ト是レ亦一般中間判決ヲ許スト同一旨趣ニ出テタルモノナルヲ
以テ特ニ其裁判ヲ爲スト否トハ一一裁判所ノ意見ニ在リ而シテ之ヲ爲スニ付
テハ通常辯論ノ制限ヲ命スヘケレトモ然ラサル場合ニ於テモ亦同シク其裁判ヲ
爲スコトヲ得ルモノナリ唯此裁判ヲ爲スニ付テハ請求ノ原因及ヒ數額ノ
就レニ付テモ争アルトヲ必要トス若シ其一二付キ争ナキトキハ固ヨリ原因
就レニ付テモ争アルトヲ必要トス若シ其一二付キ争ナキトキハ固ヨリ原因

テモ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ故ニ附帶控訴ハ公廷ニ於テ其申立ヲ爲スコトヲ得
ルモノナリ(第二)主タル控訴ヲ爲スニハ必ス其申立書ヲ差出サナルヘカラスト
雖モ附帶控訴ヲ爲スニハ必スシモ申立書ヲ差出スニ及ハス故ニ附帶控訴ハ公
廷ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ申立フルコトヲ得ヘシ(第三)附帶控訴ハ控訴裁判所ノ
檢事モ亦之ヲ爲スコトヲ得レトモ主タル控訴ハ控訴裁判所ノ檢事ニ於テハ之
ヲ爲スコトヲ得ス(第四)主タル控訴ヲ取下タルトキハ附帶控訴ハ當然其效力ヲ
失フモ附帶控訴ヲ取下タルモ主タル控訴ハ其效力ヲ失フモノニ非ス主タル控
訴ニ對シテノミ判決ヲ下シ附帶控訴ニ對シ何等ノ判決ヲ下ナナルハ請求ヲ受
ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サナルモノニシテ違法ノ判決タルヲ免レス又大審
院ニ於テ甲控訴院ノ判決ヲ破棄シ事件ヲ乙控訴院ニ移シタルトキト雖モ甲控
訴院ニ於テ檢事若クハ被告ノ爲シタル附帶控訴ハ消滅スルモノニ非ス故ニ乙
控訴院ハ其附帶控訴ニ對シテノミ判決ヲ爲サナルヘカラス若シ之ヲ爲サナルト
キハ請求ヲ受ケタル事件ニ付キ判決ヲ爲サナル違法アリモノトス

第一審判決ニ對シ檢事カ爲シタル刑期輕キニ失ストノ附帶控訴ハ被告ヲ控訴

下其性質上一致すべきモノニ非ス故ニ其場合ニ於テ検事ノ附帯控訴ヲ理由有リトシ第一審判決ヲ取消シ第一審判決ヨリ重キ刑ヲ言渡スニ當リ被告ノ控訴ヲ理由アリトシテ第一審判決ヲ取消シ無罪ヲ言渡ストキハ検事ノ附帯控訴ヲ理由アリトスルヤ否ヤ此疑問ニ對シテハ二説アリ第一説ハ検事ノ附帯控訴ハ相立タルヲ以テ理由ナシトシテ之ヲ棄却スヘシト主張シ第二説ハ検事カ獨立シテ刑期輕キニ失セリトシテ控訴ヲ提起シタル場合ト雖モ裁判所カ無罪ノ心證ヲ得タルトキハ検事ノ控訴ヲ理由アリトシテ第一審判決ヲ取消シ無罪ノ言渡ヲ爲スコトヲ得ル以上ハ検事ガ被告ノ控訴ニ附帶シテ控訴ヲ爲シタル場合ト雖モ無罪ノ心證ヲ得タルトキハ其附帯控訴モ亦理由アリト謂ハツクヘカラス故ニ検事ノ附帯控訴ヲ理由アリトスルヲ以テ相當ナリト主張セリ甲控訴院ノ爲シタル判決ニ對スル再審ノ訴ヲ理由アリトシテ該判決ヲ破設シ乙控訴院ニ事件ヲ移シタル場合ニ於テ乙控訴院ニ検事ハ被告ニ不利益ナル附帶控訴ヲ爲スコトヲ得サルモノト不何ナレバ再審ノ訴ハ被告ノ利益ノ爲ス

(一) 許シタルモノニシテ再審ノ爲メ事件ヲ移シタル以上ハ被告ノ利益ノ爲メ
審判ヲ爲スヘキモノナレバ其目的ニ反スム不利益な附帯控訴ヲ爲スコトヲ得
タルハ當然ナレハナリ^{本件は上級法院に原告の異議入付を候つたが、被上級法院に}
(二) 如何ナル判決ニ對シ控訴ヲ爲スコトヲ得ヘキか控訴本或裁判所カ第一審
ニ於テ爲シタル本案ノ判決及ヒ公訴不受理又ハ管轄違ノ申立ヲ却下狀久以前
案前ノ判決ニ對シ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ而シテ其判決カ區裁判所ノ爲シタル
判決ナルト地方裁判所ノ爲シタル判決ナルトヲ問ハス又其判決カ言渡シタル
刑期ノ長短若クハ金額ノ多寡ニ拘ハラサルモノトス故ニ區裁判所ノ管轄ニ屬
スヘキ事件ヲ地方裁判所ニ於テ審判シタル場合ト雖モ其判決ニ對シテ控訴ヲ
爲スコトヲ得ルモノナリ本案ノ判決ニ對シテハ總テ控訴ヲ爲スコトヲ許スモ
本案前ノ判決ニ付テハ公訴不受理又ハ管轄違ノ申立ヲ却下シタル場合ニ非サ
レハ控訴ヲ爲スコトヲ許サス本案前ノ裁判ハ前ニ述ヘタル如ク其種類尠カラ
ス故ニ若シ其裁判ニ對シテ控訴ヲ爲スコトヲ許ストセハ徒ニ本案ノ裁判ヲ
遷延セシムルノ處アルヲ以テ之ヲ許ササルモノナレヒトモ公訴不受理又ハ管轄

逃ノ申立ヲ却下スル判決ハ本案ニ影響ヲ及ホスヘキ裁判ニシテ若シ此判決ニ
對シ控訴ヲ許ナサルトキハ受訴裁判所ハ逃ミテ事實ノ取消ヲ爲シ本案ノ判決
ヲ爲ナサルヘカラス而シテ本案ノ判決ヲ言渡シタル後控訴審ニ於テ其事件ハ
公訴不受理又ハ管轄違ト爲リタルトキハ受訴裁判所カ本案ノ審判ヲ爲シタル
コトハ全ク徒勞ニ屬スルヲ以テ公訴不受理又ハ管轄違ノ申立ヲ却下シタル本
案前ノ裁判ニ對シテハ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ許シタルモノナリ(第一八七條)
(三) 控訴ヲ爲スコトヲ得ヘキ者ハ通則ニ於テ叙述シタル上訴ヲ爲ス權ヲ有ス
ル者ニ外ナラサルヲ以テ茲ニ之ヲ贅セス
(四) 控訴期間ハ判決ノ言渡アリタル日ヨリ五日間ナリトス(第二五二條第一項)
然レトモ闕席判決ニ對シ故障ヲ爲ナシシテ直チニ控訴ヲ爲ス場合ニ於テハ其
期間ハ故障期間ト同一ナルヲ以テ罰金以下ノ刑ニ付テハ判決ノ送達アリタル
日ヨリ三日間ナリトシ禁錮以上ノ刑ニ付テハ被告人自ラ判決ノ送達ヲ受クル
カ又ハ判決ノ執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヨリ三日間ナリ
トス(第二二九條)次ニ第二ノ闕席判決ニ對スル控訴期間ハ何日ナリヤト云フニ

其五日ナルコトハ論ヲ俟タサル所ナリト雖モ其五日ハ何レノ日ヨリ起算スル
カ即チ判決言渡アリタル日ヨリ起算スヘキカ將タ判決送達ノ日ヨリ起算スヘ
キカ刑事訴訟法第二百五十二條第一項ノ規定ニ依レハ控訴ノ期間ハ判決言渡
アリタル日ヨリ五日トストアリテ第二ノ闕席判決ニ對スル控訴期間セシム
決言渡ノ日ヨリ起算スヘキカ如シト雖モ若シ判決言渡ノ日ヨリ之ヲ起算スル
モノナリトセハ被告ニ於テハ判決アリタルコトヲ知ラサルニ其判決ハ既ニ確
定スルニ至ルヘシ闕席判決ハ元來假設ノ判決ナリ故ニ被告ニシテ其言渡アリ
タルコトヲ知リナカラ或期間内ニ不服ヲ申立ヲナレハ之ヲ確定シタルモノト
スルモ妨ナカルヘシト雖モ被告ニ其言渡アリタルコトヲ知ラシムルノ途ヲ盡
サシテ之ヲ確定シタリト云フハ是レ其當ヲ得タルモノト謂フヘカラス若シ
被告ニ其言渡アリタルコトヲ知ラシムルノ途ヲ盡サシテ五日後ハ控訴ヲ許
ササルモノナリトセハ第二ノ闕席判決ハ假設ノ判決ニ非スシテ闕席者ニ對ス
ル懲罰タルノ性質ヲ有スルニ至ルヘク又第二ノ闕席判決ニ對シテハ控訴ヲ許
ササルト同一ノ結果ヲ生スルニ至ルヘシ故ニ予ハ第二ノ闕席判決ニ對スル五

シ禁錮以上ノ刑ノ言渡ニ付テハ被告本人自ラ判決ノ送達ヲ受タルカ又ハ判決ヲ執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヨリ起算スルヲ以テ罷當ナリト信スル者ナリ

附帶控訴ニ付テハ別ニ期間ノ設ナシ故ニ附帶控訴ハ主タル控訴ノ判決アリニ至ルマニ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得ヘク辯論終結後ト雖モ之ヲ爲スハ妨ナカルヘシ(第二五九條第一項)

期間經過後ニ係る控訴ノ申立アリタルトキヘ原裁判所ハ決定ヲ以テ之ヲ棄却スルコトヲ得ヘシ是レ被告人及ヒ訴訟記録ヲ控訴裁判所ニ送致スルノ煩フ遅ケンカ爲メニ設ケタル便法ニ外ナラズ但此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ(第二五五條然レトモ原裁判所ニ於テ期間經過後ノ控訴ナルニ心付カズシテ被告人並ニ訴訟記録ヲ控訴裁判所ニ送致シタルトキハ控訴裁判所ハ公辯チ開ヤ以テ控訴ヲ棄却セサルヘカラス(第二五四條)

(六)

(4) 控訴ノ效果ニアリ即チ左メ如シテ既存民衆ニ權威失ハ其謀ニ忠告及
訴裁判所ハ事實上ト法律上トヲ問ハス總タ事件ノ覆審ヲ爲スモノナリ但此
效力ニハ三箇ノ制限アリ即ち既存民衆ニ權威失ハ其謀ニ忠告及
訴裁判所ニ控訴ノ控訴裁判所ニ覆審ノモナリト雖モ其覆審ヲ爲ス
ハ控訴申立書ニ記載シタル部分ノミニ止マリ其他ニ及ブヘカラナルモノト
ス故ニ例ヘ公私訴ノ判決ノ実場合ニ於テ被告カ公訴ノミニ對シ控
訴ヲ爲シタルトキハ覆審ヲ爲スハ公訴ノミニ止マリ私訴ニ及ブヘカラヌ又
被告カ私訴判決ノミニ對シ控訴ノ申立ヲタルトキハ其覆審ヲ爲スハ私訴ノ
部分ノミニ止マリ公訴ニ及ブヘカラサ然カ如シタルトキハ其覆審ヲ爲
スニノ疑問ト爲ルヘキナリ他ナシ數箇ノ重罪アリト認メ刑ノ言渡
ヲ爲シタル判決ニ對シ被告カ一ノ重キ重罪ノ點ノミニ付キ不服アリトシテ
被訴ヲ爲シタルトキハ控訴裁判所ハ一ノ重キ重罪事件ニ付テノミニ覆審ヲ爲
スニキガ將來數箇ノ重罪罪全部ニ對シテ覆審ヲ爲スニキ既存民衆ナムカ遂云フ

ニ在リ此問題ニ付テ小二説アリ第一説ニ於テハ控訴審ニ繫屬スルハ被告カ不服ヲ申立タルノ重キ重罪事件ノミナルヲ以テ覆審ヲ爲スハ其部分ノミニ止マリ其他ニ及ブカラス被告カ不服ヲ申立タル他ノ部分ニ付テハ第一審判決ハ既ニ確定シタルモノナビハ刑法第百二條ノ餘罪俱發例ニ依リ處分セナルトカラズ主張シ第二説ニ於テガ一ノ重キ重罪事件ノミニ對シ控訴ヲ申立タリト雖モ數罪俱發例ニ依リ處斷シタルモノナルトキハ他ノ犯罪ハ牽連シテ相應ルヘカラナルラ以テ總テス事件ニ付キ覆審ヲ爲シ刑法第百條ノ餘罪俱發例ニ從ヒ處斷セナルヘカラズ主張セリ大審院ノ判例ハ從前ハ第一説ノ如クナリシモ最近ノ判例ニ於テハ第二説ヲ採用シタリ蓋著々事務を辦理致す事務官は其職務に就く事務を其職務に就く事務

(2) ② 控訴ハ事件ヲ控訴裁判所ニ繫屬セシムルモノナリト雖モ其覆審ヲ爲スハ控訴ノ性質ニ依リ制限セラルルモノトス事故ニ民事原告人ノ控訴ハ私訴判決ニ對シテノミ其效ヲ有シ公訴判決ニ對シテノミ其效ヲ生セヌ又檢事ノ控訴ハ公訴判決ニ對シテノミ其效ヲ有シ私訴判決ニ對シテハ其效ヲ生セヌ

地ノ生産力ヲ消耗スルノ弊アルノミカラス之カ契約締結ノ手数ヲ重ヌルヲ以テ一方ニハ地價ノ昂騰ヲ來スヘキ時期ヲ越エサルコトヲ要スルト共ニ一方ニハ小作人ヲシテ其勞力ヲ資本トテ投下スルニ足ルヘキ充分ノ餘裕ヲ與ヘサルベカラス獨逸ニ在リテハ年期小作ノ期限ハ通常十年ヲ下ルコトナキヲ例ト爲セリ然レトモ英國等ニ在リテハ其期間ノ長短ニ拘ハラス之カ期限ノ到來ニ際シテハ小作人ハ勢ヒ成ルヘク經費ヲ節略シテ土地ノ生産力ヲ消耗スルノ憂アルヲ以テ期限ノ終ニ在リテハ小作人カ土地ノ改良等ニ支出セシ經費ニ對シテ相當ノ報償ヲ與フルコトアリ其他官有地ノ肥料、牧草等ハ總テ官有土地ニ使用スヘキモノトシ官有土地ノ小作人ハ政府ノ小作地以外ノ小作ヲ爲スヘカラスト爲ス等各種ノ制限ヲ設ケテ官有土地ノ生産力ヲ保護スルヲ例ト爲セリ其他獨逸等ニ在リテハ土地ヲ外一定ノ器具機械、家畜、建物等ヲ同時ニ貸與シテ特別ノ小作法ヲ契約スル古事アリ體ヲ歐洲ニ在リテハ小作人ハ保證金制度モ亦重要ナル問題ニ屬セテ其上旗ニ懸けシテ本賣ニ付キ通狀開セ奥ヒ

(乙) 世襲小作法・世襲小作法ヨリ永久ニ世襲シテ小作セシムルハ法ニ付テ

般ニ其小作人ノシテ借地權ヲ相續シムル事ニ大ニ不之ヲ一定の條件ノ下ニ賣買スルコトアリ。其土地ノ拂下ニ對シナハ之カ公賣ニ付キ。優先權ヲ與フルヲ例ト爲セリ。此法ハ古來ヨリ官有財產ト關聯シテ羅馬ノ市邑ノ其領地ニ於テ發生シ中世ニ至リテモ寺院ハ多ク此制度ヲ採リタリ。此法ハ其實質ニ於テ義務ノ不履行ニ對シ教正權ヲ附帶セシム一種ノ買戻約款附賣買ト看ルコトヲ得ヘタ時代ノ變遷ニ伴ニ亦小作料ノ實價ニ變動ヲ來スル弊大キニ非ヌル。モ土地ノ生产力ヲ涸渴セシムルメ憂少ク監督經費ノ煩累ヲ避ケテ一定ノ地代ヲ得ルカ故ニ一般ニ公共團體ノ採用スル手段タリ。此其額ニ支出しサム。然後ニ後ニモヘタハ小作人第三款官有土地ノ利害

官有土地收入ノ利益ト其收入カ自然力ヨリ生名バ特種ノ所得タル點ヨリ土地私有制度ヲ全廢シテ總カ之ヲ國家之手に歸一セシムヘシト爲ス。說ハ若シ買收法ニ依ラサル無償ノ國有強制歸屬論トスレハ當ニ不正不法ノ手段タルノミナラス。私有財產ノ基礎確立セシ今日ニ於テハ不能ニ屬スル空論ト謂ハスンハ非シ。

又若シ買收ニ依ル國有論トスレハ之カ買收金額買收ノ手續之カ經營ニ關スル實際問題ヲ顧ミサル架空ノ僻論ト謂ハズシハ非ス故ニ茲ニハ官有土地拂下ノ可否即ち保存ノ是非ニ付キ其大要ヲ講述スベシ。國家ノ陥落と衝突ニ來バ官有土地保存論ハ前世紀ニ在リテハ「ユースチ」等カ租稅ニ優レル財源トシテ唱道セル所ニ係ルモ重農學派及ヒアダム、スマス派カ之ニ對シテ絶對ノ拂下論ヲ主張シテヨリ今世紀ノ中葉ニ至リテウ等カ社會政策問題ニ關聯シテ之ニ反對ヲ爲ス者夥シト爲ナサレトモ大體ニ於テハ各國皆拂下ノ方針ヲ採ルモノノ如シ然レトモ此等學說ノ駁斥ノ理論ノ是非ニ非スシテ寧ロ時ト處正ニ依頼實際問題ニ歸著スルコト多キ。以テ固ヨリ絶對ニ之カ可否ヲ論斷スヘキモノニ非ス。今兩者所說ノ大要ヲ列舉スレハ次ノ如シ。

第一官有土地拂下論合凡其ハ舊制を廢止シ新制を導入する事と實現土

(甲) 絶對ノ理由
 (一) 財政上ノ理由甚基並逐入尋常土へ計画ニ風火ヘテ財源を要ハス事務ハ
 (4) 官吏ハ利害關係比較的薄きヲ以テ之カ管理ニ洽淡ニシテ徒ニ事務ノ

- (甲) 煩雜ヲ來シ時ト努力トノ冗費ヲ大ニスル理由ニ當ニ於テ之ヲ法規ノ下ニ支配セラルル政府ノ行動ニ於テ期シ難キコト
 (乙) 業物ノ賣却其他私人經濟上ノ行動ニ屬スヘキ敏活ヲ要スル事務ハ
 (丙) (ア) 業官有土地ノ制ハ人民ノ耕地ヲ減少スルカ故ニ結局却テ人民ノ實際上
 (ア) 負擔ヲ增加スルニ至ルコト
 (乙) 經濟上ノ理由
 (イ) 私經濟ノ行動ハ密著ノ利害關係ヲ有スル當事者ノ敏活ナル行動ニ依
 (ア) ラスンハ之カ生產ヲ大ニスルコト能ハズルコトヘ依拠シ射ム
 (丙) (ア) 官有土地ノ經營と土地ノ生產力ヲ潤滑シ一般ノ通弊タル保守的政策
 (ア) ノ下ニ之カ充分ノ改良進歩ヲ期シ難キコト
 (乙) 政治上ノ理由
 (ア) 土地ノ主體タル國家ト公共經濟ノ主體タル國家ト利害ノ衝突ヲ來シ
 又政府ト一般地主間ニ於テ不法ノ競争ヲ來スコト
 (丙) 官有土地ノ收入巨額ニ上ルトキハ議會ノ財政上ノ制限及ヒ監督ヲ受

- (甲) 財政上ノ理由
 (一) 反對論者ノ財政上ノ批難ハ少々トモ地方團體ノ公有土地ニ對シテ該當セサルノミナラス近時小作法其他各種ノ方便ニ依リ之カ弊害ヲ除去スルニ至リタルヲ以テ所謂反對論者ノ財政上ノ批難ハ却テ民有ノ大農制ニ於テ其大ナルヲ見ルヨトキ
 (二) 官有土地ノ價額及ヒ收入ハ文化ノ進歩ト人口ノ増加ニ伴ヒ年年遞増ス
- 第二回 官有土地保存論
- (甲) 財政上ノ理由
 (一) 反對論者ノ財政上ノ批難ハ少々トモ地方團體ノ公有土地ニ對シテ該當セサルノミナラス近時小作法其他各種ノ方便ニ依リ之カ弊害ヲ除去スルニ至リタルヲ以テ所謂反對論者ノ財政上ノ批難ハ却テ民有ノ大農制ニ於

(二) ルモノナルヲ以テ官有土地ノ拂下ヲ爲支ハ自前ノ小判ヲ得ルカ爲主三將來ノ大利ヲ捨タルモノナルコト

(三) 所謂官有土地ノ社會ニ及ホス不便不利ト帮セラルモノハ種税ニ比ジテハ少キニト固ヨリ論ナク若シ之カ管理宜キヲ得シニハ積極ニ國家ニ

(一) ノ財源ヲ造リ延テ國民ノ負擔ヲ減少スルモノナルコト土地ニ接當

(四) 領官有土地ハ政府ノ信用ヲ維持スル方便ニシテ公債ノ募集其他ノ信用取

事ニ引ラ容易ナラシムルコト

(乙) 經濟上ノ理由

(一) 軍事上又ハ勸業上ノ目的ヨリ官有土地ヲ必要トスル場合多ク殊ニ農業ノ模範トシテ特種ノ農業ノ改良發達ヲ來スコト

(二) 大農制殊ニ大地主ノ下ニ在ル不生產ナル請負制度ノ弊害少キニト重則

(丙) 政治上ノ理由

(一) 小作制度改良ノ先駆ト爲リテ一般ノ農業ノ制度組織ノ改良ヲ來スコト

(二) 元首ノ所得ニ對シ獨立ノ財源ヲ造ルコト

(三) 地主ノ財源ヲ擴張シ國庫充實ニ資する事也

(三) 社會政策上大地主制ノ弊害ヲ除去シ自作農夫ノ扶植ヲ來スコト

上述ノ如ク官有土地保存ノ公否ハ「利害ニシテ到底之ヲ簡簡ノ事實問題ニ讓ルノ外ナキモ一方ニテ新官有土地ヲ買上クル必要ナキト共ニ又一方ニハ官有土地ノ經費多キニ遇タルモノハ又強ヒテ之ヲ保存スルノ必要ヲ見ス但土地拂下ノ場合ニハ其土地ノ廣狹拂下ノ時期等ニ付キ總テ慎重ナル措置ヲ採リ成ルヘタ數多ノ自作農夫ニ拂下タルコトヲ要スルハ既ニ述ニタル所ノ如シ

第二節 官有森林

森林トハ樹木ノ繁茂セル地面ヲ指スモノナヒトモ英吉利及ヒ獨逸等ニ在リテ

ハ特ニ君主カ狩獵ノ目的即チ鳥獸等ヲ保存スル者爲メニ領有スル地面ニ指シテ森林ト稱スルコトアリ然レトモ茲ニ所謂森林トハ樹木ノ繁茂セル土地ヲ指スモノニシテ其政府ニ所有權スルモノ又官有森林ト謂フモ概ヘテ其森林ハ森林ハ其標章又オルニ從セ各種ノ分類ヲ爲スコトヲ得シシ即テ其所在地ノ

狀況ヲ標準ト爲ストキハ之ヲ山林及ヒ平林ニ分ツコト得ヘシ其土地ノ性質ヲ標準ト爲ストキハ絕對的森林及ヒ相對的森林ト爲スヨトヲ得ヘシ其森林ノ效用ヲ標準ト爲ストキハ收入林又供用林施業林トモ謂ク及ヒ保安林又保存林、保護林トモ謂フニ分ツコトヲ得ヘシ其所有權ノ存在ヲ標準ト爲ストキハ御科林國有林部分林公有林社寺林及ヒ私有林ノ六種ト爲スヨトヲ得ヘシ(明治三十二年法律第四十六號森林法参照)

森林ノ效用ハ直接ニハ木材薪炭等ノ主產物樹液果實蘭草等ノ副產物ヲ無限ニ生産シ得ヘキノミナラス間接ニハ土砂ノ崩崩流出及ヒ飛砂頑雪堅石風水海潮等ノ災害ヲ豫防シ水源ヲ涵養シ風土氣候ヲ調和シ山水ヲ風致ヲ保存スル等森林ノ經營ハ公共ノ利益ニ重大ナル關係ヲ保持スルヲ以テ(森林法第八條参照私ノ不能ノ欲望ニ屬スベキ場合カラナルノミナラス又私人可能ノ欲望ニ屬スルモ森林其モノノ本來ノ目的ハ相對的不正ノ欲望又ハ私人ノ滿足スルニトヲ欲セナル欲望亦多シトス所謂一部ノ論者カ森林ヲ官有ト爲スヘシト曰ヒ延ニ森林收入ハ無償收入ナリト論シ又ハ森林ハ國ノ公產ナリト論スル者アルニ

至ルハ要スルニ森林ノ間接效用著大ナルニ基因セリ土壤潤澤等事項又森林ノ直接效用

第一款 官有森林ノ利害

森林ヲ官有ト爲スベキ理由ヤ一言ニシテ之ヲ蔽ヘハ森林事業ハ公益事業たりト云フニ外ナラス故ニ之カ是非ハ第一、國家カ森林ノ經營ニ當レル場合ニ於ケル效果第二、純然タル利己心以外ノ動念カ森林ノ所有者ニ及ホス勢力即チ私人ノ行為ニ依リテ障害セラルル公益ノ分量ノ二點ヲ決スルヲ以テ足レリトス
第一、消極ノ理由即森林ノ官有ノ消極的理由トハ森林ヲ官有ト爲スモ私人力森林ノ經營スル場合ニ比シテ毫モ其直接及ヒ間接ノ效果ヲ削減スルコトナキノミナラス森林經營本來ノ目的ハ却テ官業ニ適當ナルヨニシテ之ヲ總論財政ノ範圍ノ章ニ對スレバ正ニ私人ノ不能ニ屬スル正當ノ欲與及ヒ私人ノ可能ニ屬シテ私人ノ一般ニ滿足スルコトヲ欲セナル正當ノ欲望ニ二者ヲ包含スルコトア謂フモソナリ今森林ヲ官有ト爲スベキ消極的理由ヲ細別スレバ次リ如右

(甲) 森林事業ハ疏放的活動ヨリ森林ノ事業即チ樹木ノ扶植培養及ヒ採伐の

素ヨリ營林ノ學識と經驗トヲ要ス高め農業未如々集約的夫シテ復無ナル勢力ヲ要スルモノニ非ス體外政府カ之ヲ經營スルニ當以テ毫無官有土地營理ニ付テ受クルカ如キ批難ヲ生スルノ憂ナ考却テ直接營理法ヲ以フ便宜速爲ス所ナ是レ官有土地ノ管理並批難六主不シテ耕地ノ性質ハ私人カ小仕掛ニ依リテ熱心ナル熟練ト注意トヲ要スヘシニ基因スルニ反シ森林ノ性質ヲ私人ニ於キモ所謂小仕掛ノ經營又許サアルモナヒハ勿以テ效果を謂期ニ成セイ大半ハ主トシテ次ノ三理由ニ基ケラム依量、二種ニ及ベリ又以テ量少ナル事例(イ)森林ノ利潤ハ他ノ事業ハ比シテ甚少ナルコト除ニ既往に幾回明セ説八(ア)森林ノ收穫ハ長年月ヲ要スルヨリ森林、農業ニ需シム場合の致シ(バ)森林ノ生産物ハ之ヲ市場ニ運搬スル爲メ交通機關ノ設備維持及ビ之ヲ運送ニ付キ巨額ノ費用ヲ要スルコト

第二 積極ノ理由 森林官有ノ積極的理由トハ森林ハ之ヲ民有ト爲スヘカラタル場合多キノ事カラス之ヲ官有ト爲スヨリ財政上利益多キモノニシラ之

ヲ總論財政ノ範圍ノ章ニ對スビテ私人ノ可能ニ屬スル相對的不正ノ欲望上看ルベキ所以ヲ指スモリナリ今森林ヲ官有トスベシトノ積極的理由ヲ大別スレハ次ノ如シテ森林ノ其弊害又其利點又其利害也云々

(甲) 森林事業ハ公益上官有下爲スニキコト森林事業ハ巨額ノ資本ヲ要スルニ拘ハラス之カ收穫ニ長年月ヲ要スヘキコトハ既ニ上述スル所ノ如シ故ニ之ヲ私人ノ修理ニ委スルトキニ一時ノ私益ヲ先ニシテ永久ノ公益ヲ後ニスル有弊最モ其著シキヲ見一方ニ苗樹ノ植付及ビ培養ヲ怠ルノミカラス即方ニハ採伐ノ場所、時期及ビ順序ヲ顧ルヨトナク採伐ヲ肆ニスルニ因リ森林ノ直接及ヒ間接ノ效用ヲ併セ失フニ至ルハ現時我國ニ於テ見ル所ナリ森林ノ直接ノ效用即チ木材薪炭ノ生産ハ爲メニ絕對ニ其分量ヲ減スルハシナテ數十百年左歲月ヲ要スル巨大ノ木材ハ永久ニ間断ナキ需要アルモノ才歷ニ拘ハラス潮次其述ヲ絶ツニ至リ間接ノ效用ニ於テハ爲メニ氣候ニ急激な變化ヲ求シ雨量ヲ減シ霜雪ヲ大ニシ寒暖其度ヲ失シ人體・生産物ハ發達ヲ害殊無洪水ノ災害ニ至リテハ行政上ノ煩勞財政上收入ノ減少之カ救濟及ビ復舊ヲ爲スカ爲キニ要

スル巨額ノ支出風土人情ノ類屢等有形ニ無形ニ幾多ノ弊害ヲ來スノミナラ
幾多ノ貴重ナル人命及ヒ財産ヲ暴殄スルニ至ルハ我國ニ於テ頻年見ル所ナリ
(乙) 森林ハ財政上官有ト爲スヘキコト 森林ハ實ニ公益上之ヲ官有ト爲スヘ
キ場合勘カラツルノミナラス之カ經營ハ却テ官業ヲ適當ト爲ストバ上述ス
ル所ノ如シ隨テ政府之カ經營ノ衝ニ當リ之カ營林及ヒ管理ノ方法甚シテ其宜
キヲ得ハ爲メニ得ル所ノ純收入ハ以テ政府ノ經費ノ一部ヲ蔽フニ足ルヘク延
テ國民ノ負擔ヲ減少スルコトヲ得ヘキハ復タ疑ヲ容レサル所ナリ但我國ハ總
面積ニ對スル森林之面積ノ比率ハ七割ニ近ク其過半ハ官有ニ屬シ各國を通シ
テ比例上最モ森林ニ富タル國ナガニ拘ハラス維新以來森林事業ニ對シテハ營林
私共ニ之カ營林ノ法ヲ怠リ徒ニ之カ濫伐ニ委棄セシム以テ其收入ハ甚大勤々
之ヲ森林事業ノ發達セル索遡ト比較スレハ我國ハ其面積ニ於テハ四十餘倍ノ
宮林ヲ有スルニ拘ハラス其收入ノ總額ハ却テ之カ六分ノ一ニタモ充タサルノ
狀況ニ在リ然レトキ明治十九年大小林區署ノ制ヲ設ケ二十四年全國大官林ヲ
政府ノ下ニ所管シ三十年四月森林法ヲ發布シ尋テ三十二年三月國有林野法ヲ

發布シ近時森林ニ對シテハ朝野ヲ通シテ留意スル者多キニ至リシヲ以テ數十
年ノ後ニ至ラハ我國ノ森林ヲ以テ國庫ノ一大財源ト爲スコトハ敢テ難シト爲
ナアルノミナラス我國公私經濟ノ發達上又之カ改良發達ヲ期セシンハ非ツル
ナリ

第三款 日本ノ森林事業

我國ノ森林事業ハ德川時代ニ至リテ大ニ見ルヘキモノアリ當時農工商業ノ勃
興ニ伴ヒ著シキ木材ノ需用ヲ高メ原野ノ開墾亦盛ニ行ハレンシモ年年需用ノ伐
木高ハ森林ノ成長量ヲ超過スルコトナク殊ニ奥羽ノ諸侯ハ大ニ森林ノ經營ニ
意ヲ用ヒ今日ニ至ルモ其蹟猶ホ見ルヘキモノ頗ル多シ當時封建諸侯ノ下ニ於
クル森林ハ概子代官地頭其命ヲ奉シ官民共利ノ法ニ依リテ經營シタルモノニ
シテ百姓林ノ如キハ純然タル民有林ナリシモ尙ホ採伐ノ許可採伐後苗樹ノ植
付等幾多ノ制限ヲ加フルヲ例ト爲セリ維新ノ革命ニ至リ從來ノ實質上ノ所有
權ハ明治五年形式ニ於テモ亦明カニ認メラレ同七年民有地ノ類別ヲ明

テ整理セラレタリ今便宜重ナル統計ヲ示セハ次ノ如シ、農業、荒野土、河床

官有地及民有地ノ段別表

官有地合計	内	二二三九	萬町	民有地合計
官林及ヒ官有原野	内	一七五八		山林
上宮地及ヒ附屬地	内	三六五		原野及ヒ牧場
之ノ公地	内	一〇七		田
日本ノ公地	内	二七三		宅地
之ノ公地	内	二三七		

卷之三

官私森林比率表		國有及帝室有	民有	面積(ヘクタール)	全面積ニ對スル百分率	人口一人ニ對スル頭割(ヘクタール)
國	名	國有及帝室有	民有	一九三一九萬	一九三〇	一九四五年
露西亞	本利	八三九	五七六	九七九	三八	二六七
獨	太	六〇	一五	二五	二二	一四七
伊	太	〇、五	〇、三三	〇、三〇	〇、二〇	〇、一三
佛	利	〇、五	〇、一三	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇
最	逸	〇、五	〇、一三	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇
蘭	亞	〇、五	〇、一三	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇
日	亞	〇、五	〇、一三	〇、一〇	〇、一〇	〇、一〇

即チ我國ハ最モ森林ニ富メル國ノ一ニシテ殆ト全面積ノ半以上ヲ占メ又其森林ノ七割ハ官有ニ屬セリ此ノ如キ豊富ナル森林ヲ有スル我國ノ官有森林ノ收入ヲ見ルニ次ノ如シ

國本名	面積	純收入	一町歩ノ純收入
日本	一七二七萬町	二六四	三八
埃及	九六萬町	八四	八四
太利	九六萬町	五八三	五八三
普漏西	二四〇萬町	二六四	二六四
佛蘭西	三〇五萬町	一四〇二	一四〇二
蘭西	一七萬町	四六三五	四六三五

日本	一七二七萬町	一四〇二
埃及	九六萬町	四六三五
太利	九六萬町	一四〇二
普漏西	二四〇萬町	一四〇二
佛蘭西	三〇五萬町	一四〇二
蘭西	一七萬町	四六三五

即チ日本ノ官林ハ索遜ノ官林ニ比スレハ其面積ニ於テ四十二倍ノ多キニ居ルニ拘ハラス其純收入ハ却ク二百八十三分ノ一一ニ當レリ故ニ我國ノ如キ豊富ナル森林ヲ有スル國ニ在リテハ少クトモ普漏西ト同純收入アリトスレハ正ニ千六百餘萬圓ノ純收入少クトモ四千餘萬圓ノ總收入ヲ得ヘキモノタリ

我國ノ森林カ此ノ如キ惑ムヘキ状態ニ在リハ啻ニ積極的ニ森林ノ經營發達キナルノミナラス消極的ニ森林ノ保護尙ホ幼稚ナルニ基因セリ森林ノ損害中ニリテモ動物、植物其他森林ノ性質無依リ容易ニ之カ保護ヲ全クシ難キモノアバモ人類人爲メニ受タル損害森林ノ保護監督ニ依リ直接ニ之ヲ裁制シ得ベキ生ノナリ近時我國ノ官林ノ損害年率十五萬圓内外シテ其大部ハ盜難風害及ヒ火災ナリ消極的ニ森林ノ受ヌル損害ニシテ尙森林純收入ノ半以上ニ達スルノ森林保護不十十分ナル證ニシテ餘アリトス森林以資難火災ハ間接

ニ水害其他甚多ノ災害ヲ察スハ一概ニ熟知アル所ニシテ所謂保安林又ル等ノ效果ハ我森林法第八條毒氣放リ又明カナシテス即ち森林ノ濫伐ハ土砂ノ崩壊、流出ヲ助ケ河底ヲ高メ洪水ノ警戒導至飛砂ニ依リク耕地ノ土質ヲ害シ水源涵養ヲ失フモノナリ近時水害頻發舊江事無用ノハキ土本費ハ其名ハ臨時費ナルモ事實トシテハ國家之經營計爲利此等災害ニ因ル人類資財ノ損失額ハ軍ニ直接ノ損害トシテ知ルヲ得ル者甚少テ年年平均二千萬圓内外上レリ總テ此直接ノ損害及ヒ之ニ伴フ有形無形ノ間接ノ損害及ヒ之カ復舊ノ爲豫防積極的生產事業ニ投シ得ヘキ巨額ノ資本ヲ消極的經營消滅ル國家ノ損害ハ其額復タ想像スルニ餘アリトスセハシテイヨガ昔西イギリスノ豊富ハ

第二章 入政府ノ產業

第一節 官行礦業

行政法上ノ鑛物ノ意義ハ各國法規ノ異ナルニ從ヒ其範圍ヲ一ニスルナト大キ

第一款 鑛物及ヒ鑛業ノ觀念

一〇・九六

モ大體原素及ヒ有機體ノ二種ニ限ラレ鹵石物(山鹽類)ノ如キハ財政上重要ナル鑛物トシテ認メラルモ通常鑛業ノ法規ノ外ニ措カバノ例トセリ(鑛業條例)
砂礫採取法)鑛物ノ行政法上ノ性質ハ或ヘ土地ノ一部ト看做シ或ハ無主物ト看做シ或ハ國家ノ所有ニ屬スルモノト看做アレ其採取權ノ如キモ或ヘ土地ノ所有權ニ附隨スル權利ト看做サレ或ヘ特種人地役權ト論ヘバアリ或ハ無主物ノ先占ニ因リテ取得セラルル特種ノ權利ナリト曰フアリ然レトモ鑛物ニ對スル古來ヨリノ沿革ト今日ノ實際ニ徴スルニ鑛床ニ以テ國家ノ所有ト爲スア以テ定説ト爲スモノノ如シ我國ノ法制ニ於テハ民法第二百一條ハ土地ノ所有權ハ法令ノ制限内ニ於テ其土地ノ上下ニ及フモノト規定シ一方ニハ鑛業條例第二條ニ於テ鑛物ノ未タ採掘セナルモノハ國ノ所有トスト規定セリ隨テ我國ノ法規ニ認ムル採掘權ハ鑛物ノ占有ニ因リテ其所有權ヲ取得スル一種ノ私權ニシテ特許ニ基クモノト解釋スルヲ至當トス但砂礫ニ至リテハ砂礫採取法ニ於テ其解釋ヲ異ニセリ

第二款 鐵業ノ沿革

鐵物ノ所有權ノ所在ハ古來學說實際ニ通シテ一途ニ出ツルコトナキカ如ク鐵業ノ管理法モ亦著シク其類ヲ異ニセリ等シク國有ト認ムルモ或ハ政府自ヲ探鉄冶金ニ從事スルゴトアリ或ハ私人ニ貸下ケテ之カ經營ヲ許スモノアリ或ハ特定ノ鐵山ニ限リテ政府ノ官業ト爲スモノアリ或ハ鐵物ノ種類ヲ限リテ私人ノ探掘ヲ許スモノアリ鐵山ノ一部ニ私人ノ探掘ヲ許可シ之ニ依リテ得ル免許料及ヒ探掘料ハ中世紀ニ至ルマテハ所謂「レガリヤ」ニ屬スルモノ最モ重ナル部分ヲ占メタリ其後英國ニ在リテハ鐵業ノ主權ハ金銀鐵ノ二種ニ限ラレ米國モ亦大體ニ於テ英國ノ制ニ倣ヘリ現時歐洲大陸ニ於テ最モ廣ク用ヒラルハ鐵物ノ占有者ニ鐵業ノ自由ヲ認ムルノ制ニシテ何人ト雖モ鐵物ヲ發見シ法規ノ定ムル所ニ準據シテ之カ探掘ヲ爲シタル者ハ其所有權ヲ取得スルコトヲ得ルモノト爲セリ我國ニ於テハ明治二十三年ニ至リ又此主義ニ依リ鐵業條例ヲ公布シ鐵業主權ノ主義ヲ廢セリ

第三款 廉官行鐵業ノ得失

政府カ鐵業ヲ經營スルノ得失ハ時々處ニ依リ必ズシモ一定ノ論斷ヲ下シ難キモ鐵業ノ發達セル今日ニ於テハ鐵業ヲ舉クテ政府ニ歸屬セシムルノ要ナク又絕對ニ官行ノ鐵業ヲ否認スヘカラナルモノアリ此種ノ營業ハ巨額ノ資本ヲ要シ長期ノ成立ヲ條件ト爲シ其利潤不確定ナルノミナラス之カ取得ニ長年月ノ經過ヲ待ツフ要スヘキモノナルヲ以テ會社事業ノ發達セサル時代ニ在リテハ國家自ラ進ミテ之カ經營ニ當ルノ要アルモ漸次其必要ノ度ヲ減スルハ言ヲ俟タル所ナリ民業ノ鐵業ヲ批難スルハ或ハ鐵業ノ利潤ノ多少或ハ鐵業者ノ聯合ニ基ク鐵物ノ價格ノ高下特種ノ有用ニ該シ且限アル鐵物ヲ溢出せシ在ル事官行ノ鐵業ハ到底法規ノ下ニ行動スル政府ノ事業ニ不適當ナルノ制ナラ莫葉ニ對スル批難モ行政上ノ監督又財政上ノ課稅等ニ依リテ之ヲ救濟スルヲ難シト爲ナス我鐵業條例ノ如キモ一方ニハ鐵物ノ國有ナ原則トシテ之カ試據ニ對シ政府ノ特許ヲ條件ト爲シ鐵業人ノ實格出頭手續鐵業ノ場所及ヒ其探掘ニ對シ政府ノ特許ヲ條件ト爲シ鐵業人ノ實格出頭手續鐵業ノ場所及ヒ其

第一節 官行工業

如本其一部之三類スルモア支那人民二百三十二萬圓支出二百四萬圓營利二十
、并入へ營業採供金銀、財物採品並、銷便採其蟲等類へ郊人租直大々に起
居間、對於ニ、**第一款官行印刷業**、ハチヘ、費智經業又其國、營業員
政府ノ文書ノ祕密及ヒ之カ印刷ノ敏活、確實ヲ保證スル爲メ各國政府自ラ印刷
事業ノ經營ヲ爲モノ多シ殊ニ政府發行ノ各種ノ刊行物、式紙帳簿類其他證券
印紙、切手、業書等ノ物品ヲ製作ヲ爲シ傍ラ候施工場トシテ斯業ノ技術的發達ニ
力ヲ與フルヨト多シ我國印刷局作業之收入ハ三十一年度ノ豫算ニ依レハ百七
十三萬圓之三對スル支出ハ百五十六萬圓ニシテ結局十七萬圓ニ益金ヲ生スル
豫算ナリ

第三款 官行兵器製造業

支
三

製造ノ祕密ト優等ノ物晶ノ製造トノ保證ヲ目的ト爲ス工業ハ主トシテ兵器ノ製造業ナリ民間ノ工業未タ發達セサル時期ニ在リテハ此等官業ノ必要多カリシモ今日ニ至リテハ漸次其必要ノ度ヲ減シ之カ民業經營ノ可否ハ時事ノ問題

財政學 政入論 官僚收入 政府ノ產業 官行工業

一一五

總參考大明月懸、工業未竟、財政空虛、部庫亦空、本來無出納官員、奉天等處、明治三十五年度豫算、獎勵不敷、經費自領、核減為止、工業八項、日支兵器、六百八十八萬圓、六百八十八萬圓、支、出、入、收、支、出、六百八十八萬圓、六百八十八萬圓、

六百七十三萬圓

六百七十三萬圓

式ノ鎮守府造船材料費金四百零三百十一萬圓正三十一年萬圓百廿
昭和電信燈臺用品製造所 費金二十九萬圓
事業ノ總額 二十九萬圓
第四款 官行造船業
類似文書
信用ノ維持ヲ目的トスノ官行工業ノ重ナルモノハ造船事業ナリ我國ノ造船局
ノ收入ハ鑄造料、地金銀ノ精製料、品位ノ證明料其他各種ノ收入附加スルヲ以テ
三十五年度ノ豫算ニ依レハ作業收入二百三十二萬圓支出二百四萬圓差引二十

八萬圓ノ益金ヲ生スル豫定ナリ

官行獨占ノ製造業ト一般民衆ニ依リテ生産能ラカル特種ノ財貨フ獨占スル
官行工業ニシテ通常其生産物ノ販賣ヲ併セ經營スルコトアリ隨テ其形式ハ貿
財ノ生產業ニ外ナラナルモ其實質ハ獨占ノ作用ニ依リテ通常ノ利潤ノ比率以
上ノ收入ヲ獲得スルヲ目的トシ租稅收入ノ一種ノ變形ニ過ヤナルモノナリ此
種ノ官行工業ハ通常煙草醸製片樟腦等ニ其例ヲ見ルコト多シ現時我國ニ於テ
葉煙草專賣葉煙草獨占ノ製造ト爲スノ可否ハ一部ニ於ケル時事問題ト爲レリ
シ利害關係密接ガル又以ス一方ニハ社會政策上ヨリ之カ民衆ヲ批難シ一方ニ
自然的獨占事業ニシテ政府ノ工業ト認ムヘキ重ナルモノハ水道瓦斯電燈等ノ
事業トス此等ノ事業ハ公共事業ノ一種也然ニ衛生其他ノ點ヨリ社會全般ニ通

第六款 官行自然的獨占工業

自然的獨占事業ニシテ政府ノ工業ト認ムヘキ重ナシセノハ水道瓦斯電燈等ノ事業トス此等ノ事業ハ公共事業ノ一種トシテ衛生其他ノ點ヨリ社會全般ニ通シ利害關係密接ガル又以ニ一方ホヘ社會政策上ヨリ之カ民業ヲ批難シ一方ニ財政學
人間學
有價證券
政府公債
官行工場

ハ自治財團在財源トシテ之ヲ都市ノ公有私有爲メヘシトヤ大般學説者マ致表也所ナリ殊モ一般人民ニ甚及本キ水道事業又如キ外國無於テ其大部ハ公有主爲メ我國又如キモ當初ヨリ之カ公有ヲ候管ト爲メリ電燈瓦斯事業等至リテモ近時都市ニ於テ新ニ之カ經營ニ從事シ又ハ民業ヲ買上タルモノ相次キ近時佛國ニ於テ調査セル所ニ依ルモ歐洲ノ瓦斯事業ハ其半ハ公有ニ歸屬スルニ至レリト云フ草稿古ヘ雖昔イタリ否ニ「猶ニ誠ヤハ他事同様」欲ノ如時ノ官行工業常設草稿同様特異體也其間又異異乎「基業」與「官行商業」之似上ヘ尋入此處固有其目的也即詳述入「賦税」與「課税」或如入坐赤座第一款 緒論 資本ハ與古ヘ雖俱先端々く貢獻ト開拓ト其半足茲ニ政府ノ商業ト稱スルハ交通事業以外ノ補助商業ヲ總稱スルモノ大支蓋以固有商業ハ政府ノ事業ナシテ不適當ナルト說明ヲ俟タナ所所シテ古代ニ於テハ時時固有商業ヲ營ミタル述ナキニ非ナルモ今日ニ於テハ殆ト其例ヲ認メス茲ニ舉タル所ノ補助商業ハ銀行業富農業實業保險業郵便爲替賄金業及ヒ專賣業ノ類ナリトスハ假定本來收入一千百三十二萬圓及出二萬四萬圓差額二十

第二款 官行銀行業

銀行業務ハ國家ノ財政ト密接ナル關係ヲ有シ國庫事務官有財產ノ管理公債公募集償還等總テ金融ノ出納會計ノ整理ニ關シ銀行ヲ行動ニ待ツヨト甚タ大オリトス隨テ銀行ノ政府ノ管理ニ屬セシムルコトハ比較的ニ批難特ク現ニ露西亞瑞典ノ如キハ純然タル官立銀行ヲ有セリ而シテ此等官立銀行ハ機械的ノ性質ヲ帶フル資本ノ取扱事務ハ其大部又ハ全部ヲ廢シ貨幣ノ取扱事務ヲ主ト爲セリ然レトモ貨幣取扱事務ハ常ニ國民經濟ノ實相殊ニ金融界ノ狀態ニ通曉スル所ナクシテ非ス隨テ官立ノ銀行ハ却テ政府ノ不利ト爲ス所多々半私半公ノ銀行ハ最モ利便ナリトスル所ニシテ之ニ特種ノ特權保護ヲ與ヘ之カ報酬トシテ政府指定ノ任務ヲ負ハシムルハ皆文明諸國ニ於テ廣く行ハル所ナリ我國ノ日本銀行中央金庫本金庫支金庫ノ現金ノ出納保管ノ事務公債ノ募集借替債務事務政府發行ノ手形類ノ割引買入等ヲ取扱ヒ一方ニモ兌換銀行券之發行權ヲ許與セリ而シテ我國ハ歐米諸國ト其狀態ヲ異ニスル所ナリカ故對外業

務ニ付テハ別ニ横濱正金銀行ナル元シヲ設立シ政府並ニ日本銀行及外國三關
スル業務ハ正金銀行ヲ通シテ行ハルルコトトニ爲シテ(日本銀行條例兌換銀行券
條例金庫規則參照)日本支金取く異々出附算賃車運公司ニ裏地掛書
第三款 官行富籤業

富籤ハ技能勤勞ニ依ラスシテ富ヲ得ルヲ途アルコトヲ示ス也ソニシテ著實ナ
ク企業心ヲ抑壓シテ機械心ヲ挑發シ大多數ノ利益ヲ剝奪シテ一部少數ノ者ニ
不當ノ利得ヲ與ヘ當ノ調和ヲ棄シ社會ノ秩序平和ヲ破ルモノナリ體ヲ各國シ
法規ハ之ニ對シテ刑法上ノ制裁ヲ加ヘ之カ禁壓ヲ圖レバ至極アリ然レドモ歐
米各國ニ在リテハ一方ニ賭博ニ關シ嚴重ナル制裁ヲ附スルニ拘ハタス一方
ニハ政府自ラ富籤ヲ興行シ國庫ノ財源ト爲スモノナリ十九世紀ニ入リテヨリ
英吉利佛蘭西瑞典「バー・ベリヤ」瑞西等ノ諸國ハ相次テ之カ官業ヲ廢シ又之カ
民業ヲ禁止スルニ至リシモ尙ホ普漏西索連「ブラン・ショウイヒ」「ハンブルヒ」亞
米利加合衆國ノ「ルイジアナ」及ヒ「ケンタッキー州」等ニ於テハ官行ノ富籤行ハレ模

太利、匈牙利、伊太利等ニ在リテハ富籤業ヲ獨占官業ト爲セリ普漏西ニ於テ行ハ
ルル富籤ハ「クラフ・ローリー」(等級富籤)ト稱セラルモノニシテ政府ハ其賭
金ノ總額ヨリ手數料ヲ得ルヲ目的トセリ千八百九十八年度ノ豫算ニ依レハ富
籤ノ收入八千萬「マーク」ヲ超過セリ又伊太利ニ在リテハ「フアーレン・ローリー」
(計數富籤ナルモノ)行ハレ國庫セ亦射候ノ地位ニ立チテ其收入不定ナルモノ同年
度ノ收入ハ又六千萬「マーク」ニシテ郵便電信收入ニ超過セリ之ヲ要スルニ富籤ハ
經濟上、道德上批難スヘキモノナリト雖モ沿革上財政維持ノ手段トシテ事實已
ムヲ得サルノミナラス其土地ノ風俗民情及ヒ其富籤ノ方法如何ニ依リテハ必
シモ絶對ニ批難スヘカラナルモノアリ但富籤ニ在リテモ利息富籤ト稱セラ
ルモノニ關シテハ他ノ富籤ト全ク其類ヲ異ニシ其弊害妙キヲ以テ各國ニ廣
ク行ハル所ナリ尙ホ其詳細ハ割増公債論ノ下ニ併セ述フル所アルヘシヨリ

第四節 官行質業

質入論其目的ハ主オラモ才智實力之質

金錢ノ貸借ハ對人信用ニ基クト對物信用ニ基クトニ拘ヘラス純然タル經濟

的事業ナリト雖モ近時社會政策ノ隆興ニ伴ヒ之カ政策ノ一トシヲ特ニ對物信
用ノ一種タル質業ノ官業ヲ認ムルニ至レリ茲ニ官業ノ質業ト謂フモ事實トシ
テハ地方公共團體ノ事業ト爲スラ例ト爲セリ其目的ハ主トシテ下級社會ニ於
ケル金融機關トシテ自由ニ便宜ニ且低利ニ資金ノ需用ヲ充タナシムルニ在リ
蓋シ現時ノ下層社會ハ未タ自ラ信用組合ヲ組成スルノ地位ニ達セス銀行等ノ
金融機關ヲ利用スルノ力ナク常ニ高利ノ質業者ニ依リテ不當ノ損失ヲ受クル
ヲ例ト爲スモノナリ古來各國ニ於テハ利息ノ制限法其他質業者取締法規ニ依
リテ此等ノ弊害ヲ除却スルニ力メタルモ今日ニ至ルマテ事實ニ於テ何等ノ效
果ヲ奏スルコト能ハサルハ明カナル所ナリ獨逸ニ於テハ千八百二十六年普漏
西政府ハ勅令ヲ以テ市設ノ質業局ノ組織其他利率ノ標準等ヲ定メ又柏林ニ皇
室所屬ノ質業局ヲ設ケタリ一千八百三十三年政府ハ法律ヲ以テ各市貯金ヲ以テ
質業局ノ資本ト爲スコトヲ許セヨリ漸次之カ隆盛ヲ來シ現時ノ獨逸ノ市設
質業局ハ八十四ノ多キニ上レリ佛蘭西ノ如キモ路易十六世勅令ヲ發シテ都市
ノ重ナルモノニ質業局ノ設立ヲ命シ其資本トシテ窮民救助院ノ基本財產ヲ運

用スルコトヲ許可シテヨリ著シク發達シ現時其數既ニ四十二ニ達シタリト云
ヘリ質業局ハ固ヨリ下級ノ金融機關タルヲ目的ト爲スラ以テ其目的物ハ動產
ニ限ラレ貸付期限ハ六箇月乃至一箇年ヲ例トシ千フラン又ハ千マークヲ限度
トシ低利ヲ以テ貸付クルモノノカリトス其得ル所ノ利潤ハ元金ニ繰込ミ尙ホ殘
餘アルトキハ各種ノ慈善事業ニ授スル又例ト爲セリ所謂慈善貸付業ト稱セ者
ルモノ是ナリ

第五節 官行ノ郵便爲替及ヒ貯金業

政府ノ郵便爲替及ヒ貯金業ハ其實質ヨリ觀レハ一種ノ銀行事務ト視ルコトヲ
得ベク又其形式ヨリ觀レハ一種ノ郵便事務ト視ルコトヲ得ヘシ蓋シ郵便爲替
及ヒ貯金ヲ官業ト爲スノ趣旨ハ財政上ノ收入ヲ目的トスルニ非ヌ主トシテ行
政上ノ便宜ニ基ケリ即ち金融機關トシテ又時落心聲屬ノ機關トシテ社會全般
ノ利便ト幸福トノ營及外目的ト爲セリ蓋シ郵便爲替及ヒ貯金ノ絶對的必要大
ル所以ハ收支相償ハナル地方ニ此等ノ機關ヲ普及シテ之カ利便ノ途ヲ開ケル

ニ在リ其相對的必要ナル理由ハ私設ノ機關設備セラル以地方ニ雖も政府ノ信
用ノ一層確實ナル點ニ存不故ニ郵便爲替及ヒ賄金ヲ通シ其取引金額ノ絕對的
増加ハ固ヨリ希望ス所ナルモ營利目的トシ商業上ノ機關タルヲ主タル目
的ト爲ナサルカ故ニ爲替ノ提出及ヒ賄金ノ預入ノ金額ハ之ニ制限ヲ加ブルハ
列國ノ法規ニ於テ一致スル所ナリ我國ニ於テモ郵便賄金ハ一同五十圓ヲ限リ
總額五百圓ヲ限トシ其利子モ僅ニ四分八厘ニ止マレリ郵便爲替モ一枚ノ金額
制限ハ五十圓ヲ超過スルコトナシ郵便爲替及ヒ賄金ハ互ニ資金ヲ流用シ其金
額ノ利殖ハ大藏省ノ經理ニ屬シ其支出ニ郵便電信事業ト併セテ經營スルカ故
ニ之ヲ正確ナル數字ヲ知ルニ由ナシ然レトモ賄金ハ爲替ト異ナリ其預入額ハ
其總額ニ於テ變動渺茫カ故ニ平均二千五百萬圓内外ノ現在預り高ハ國庫ノ管
理上財政ノ上ニ著シキ利便ヲ與フルハ言ヲ娛タナル所ナリ金一圓ムノ間井義
郎也ハ六萬圓足也平尾國也千五百四十也千一百一十也

第三章 政府ノ交通業

（此頁缺）

支那通志卷一百一十九
○第一審公民訴訟ノ判決大藏省二年九月三十日
○數罪俱發例ニ依ル判決中ニ「罪」元對スル控訴事例數罪俱發例ニ依リテノ
重キ罪ニ付キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ其重キ罪ニ對シ控訴アリタルトキハ
控訴裁判所ハ當然輕キ罪ニ付テモ審理裁判スルコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ從
來議論アル所ニシテ（一）或ハ其審理裁判ヲ爲スコトヲ得ルモ此場合ハ輕キ罪ニ
付テ（既ニ判決ヲ經タルモノナルカ故ニ控訴アリタル重キ罪ハ餘罪トシテ刑
法第百二條ヲ適用ス）シント曰ヒ（二）數罪俱發例ニ依ル裁判ニ對シテ分割シテ控
訴スルコトヲ許ス（カラス）陪審裁判所ハ當然輕キ罪ニ付テモ審理裁判ス
ヘキモノナリテ（一）不告不理ノ原則ニ依テ重キ罪ノミニ付キ審理裁判スレハ
可ナリト論ス大審院ハ初メ第一「說ヲ採ラレタルカ如シト雖モ近來第二「說」依
ラルルカ如シ今其「說」ヲ示シテ曰ク「第一」審判決書ヲ查閱スルニ其法律ノ理
由説明中ニ前略淺太郎（數罪俱發ニ付同法第百條ニ從ヒ犯情尤モ重キ第二ノ
約束手形偽造行使手ヨリ處斷ス）キモノトシ特ニ淺太郎ハ本日當廳ニ於テ言

ノスト」トアリテ第一審裁判所ニ於テ本件ノ判決言渡ト同日ニ被告ニ對シテ輕懲役六年ノ刑ヲ言渡シタル犯罪ハ本件ノ犯罪ト併發シタルヲ以テ刑法第百條ノ規則ヲ適用シ一ノ重キ罪ニ從ヒ處斷シタルモノナルヤ明カナリ果シテ然ラハ右輕懲役六年ノ刑ヲ言渡シタル被告ノ犯罪事件ハ本件ト分離スルヲ得ナルモノナルヲ以テ被告ノ控訴中ニハ當然右二事件ヲ包含スルモノト云ハツルヘカラス然ルニ原院ハ淺太郎ハ岐阜地方裁判所明治三十四年三號第二五號事件ニ付同年七月二十六日同裁判所ニ於テ輕懲役六年ノ確定判決ヲ受ケ居ルモ少ニ付本案ハ其餘罪ニ係ルト説明シ判決主文ニ於テ但淺太郎ノ刑ハ前發ノ刑輕懲役六年ト通算ス「ト言渡シ右控訴中ニ包含シタル」と第二五號事件ニ付審理判決ヲ爲テナリシハ則チ請求ヲ受ケタル事件ニ付判決ヲ爲サツル不法アリト(大審院明治三十五年九月第三八一號)東京平成及委任狀爲宣行也○第二審公判ニ於ケル闕席判決手續 第二審公判ニ於テ闕席判決ヲ爲スニ方リ刑事訴訟法第二百五十八條第一項、第二百三十六條ニ依リ第二百二十七條

ノ規定ヲ準用シ呼出狀ヲ本人ニ送達スルコトヲ要スルヤ(第二百二十七條第二項ニ該ラサル場合否ヤノ問題ニ付キ大阪控訴院カ豫審終結決定書ノ本人ニ送達アリタルコトヲ理由トシ呼出狀ヲ本人ニ送達セシシテ闘席判決ヲ爲シタルヲ不當トシ檢事長ヨリ上告ニ及ヒタル論旨ニ對シ大審院ハ説明ヲ與ヘテ曰ク
「刑事訴訟法第二百五十八條ニハ『控訴ノ裁判ニ付テハ地方裁判所ノ第一審ニ關スル規定ヲ適用ス』トアリ又同法第二百三十六條ニハ『前章ノ規定ハ此章ニ別段ヲ定メナキセシニ限り地方裁判所ノ輕罪重罪ノ公判ヲ準用ス』トアルヲ以テ控訴ノ裁判ニ付テモ亦同法第二百二十七條ノ規定ヲ準用ス可キト論フ埃タス
從テ被告本人ニ於テ一審ニ豫審終結決定書ノ送達ヲ受タルニ於テハ第一審ナル第二審ナルトヲ問ハヌ呼出狀ノ本人送達ヲ爲サシシテ闘席判決ヲ爲シ得ルモノノ如シ然レトモ第二百二十七條ノ規定タルヤ被告本人ヲシテ某事件ニ付某裁判所ノ公判ニ付セラレタルコトヲ確知セシムルヲ以テ其趣旨ト爲スカラ
故ニ第一審ニ於テハ豫審終結決定書ノ本人送達ニ依リ其趣旨ヲ貫徹シ得可キ
モ第二審ニ在テ之ニ因テ以テ其趣旨ヲ貫徹シ得可キニアラヌ故ニ不可

ノ裁判判決ヲ付テハ第三百四十七條人趣旨ニ準據シ被告本人ニ於テ第二審之公判時
ニ付セラレタルヨトヲ確知セサル場合ニ在テハ呼出狀ニ本人送達ヲ爲スモアリテ
ラオレハ闕席判決ヲ爲シ能ハサルモ之ヲ確知スル場合ニ在テハ其本人送達ヲ
爲シシテ闕席判決ヲ爲シ得可キモノト解釋セサルヲ得ス而シテ本件ハ被告
ノ控訴ニ係ルノミナラス控訴ノ闕席判決ニ對シ被告ヨリ故障ヲ立タル事件
ナガラ以テ更ニ闕席判決ヲ爲スニハ呼出狀ヲ通法ニ送達シタル證アルヲ以テ
是リ其本人送達ヲ爲スノ要ナキコト辯ヲ待タブル可シ左レハ原院カ最高審終結
決定書ノ本人送達アリジノ理由トシテ呼出狀ニ本人送達ヲ爲サタリシハ其當
時欠クト雖モ其本人送達ヲ爲シシテ闕席判決ヲ爲シタル措置ハ不法ニアラ
カ云々ト(大審院明治三十五年六月六日第一七號判決)此判決ニ依レハ呼出
狀ノ本人送達ヲ要スルト否トハ被告人カ事件カ第二審公判ニ付セラレタルヨ
トヲ知ルト否トニ依リテ區別セテアルモノト謂フヘシノ例御院判決ノ如
事例ニ據エサセタル合意ナシハ間無ニ計テ大類證滿認ナ置審證滿認免
本人ニ送達スルニイニモ要スルモノ第百二十小節第一項

生徒募集廣告

○授業開始

九月十一日

○入學試驗

九月十六日、二十五日ノ二回何ニキ
午前九時ヨリ施行

○ 藝講生

今般新ニ辟業ノ制ア設ク(裏面上同)

學則ハ郵券貳錢送付アレハ即時送呈スヘシ

九
月

東京九段坂上 司法省指定

私立和佛法律學校

ノ裁判ニ付テハ第二百二十七條ノ趣旨ニ準據シ被告本人ニ於テ第二審ノ公判ニ付セラレタルコトヲ確知セサル場合ニ在テハ呼出狀ノ本人送達ヲ爲スニアラナレハ闕席判決ヲ爲シ能ハサルモ之ヲ確知スル場合ニ在テハ其本人送達ヲ爲サヌシヲ闕席判決ヲ爲シ得可キモノト解釋セサルヲ得ス而シテ本件ハ被告ノ控訴ニ係ルノミナラス控訴ノ闕席判決ニ對シ被告ヨリ故障ヲ申立タル事件ナルヲ以テ更ニ闕席判決ヲ爲スニハ呼出狀ヲ適法ニ送達シタル證アルヲ以テ足リ其本人送達ヲ爲スノ要ナキコト辯ヲ待タサル可シ左レハ原院カ豫審終結決定書ノ本人送達アリシヲ理由トシテ呼出狀ノ本人送達ヲ爲ナサリシハ其當アレクト雖モ其本人送達ヲ爲サヌシヲ闕席判決ヲ爲シタル措置ハ不法ニアラフレハ云云ト(大審院明治三十五年六月六日第一刑事部宣告)此判決ニ依レハ呼出狀ノ本人送達ヲ要スルト否トハ被告カ事件カ第二審公判ニ付セラレタルコトヲ知ルト否トニ依リテ區別セラルムモノト謂フヘシ

生徒募集廣告

○授業開始

九月十一日

○入學試験

九月十六日、二十一日ノ二回何レモ
午前九時ヨリ施行

○編入試験(第二年級)

九月二十三日ヨリ施行

○聽講生

今般新ニ聽講生ノ制ヲ設ク(裏面に欄参照)

入學志望者ハ試験前日マテニ申込マルヘシ

學則ハ郵券貳錢送付アレハ即時送呈スヘシ

九月 東京九段阪上 司法省指定 私立 和佛法律學校

聽講生規則摘要

明治三十五年九月九日印刷
(定價金貳拾五錢)

本校ニテハ本科生ノ如ク各學科ナ聽講ス

ルコト能ハサル者又ハ各自好ム所ノ學科

ニ付キ體意聽講セントスル者ノ便ヲ圖リ

新ニ聽講生ノ制ヲ設ケ來學年ヨリ實行ス

ルコトセリ今其規則ノ概要ヲ左ニ掲ク

一 入學ヲ許可セラル者ハ本校ノ証考ヲ經ル

コトヲ要ス但試験ヲ行フコトアリ

一 入學ノ際及ヒ毎月授業料二圓ヲ納ムルコト

ヲ要ス

一 聽講生ハ聽聞シ終タル學科ニ付キ聽講證

書ヲ、試験ヲ受ケ合格シタルトキハ合格證書

ヲ受クルコトヲ得

一 三年以上聽講生ト爲リ且本校所定ノ全學年

(隨意科ヲ除ク)ニ付キ合格證書ヲ有スル者ハ

本校ノ卒業證書ヲ受クルコトヲ得

發行所 指定 司法省 和佛法律學校

(電話番町百七十四番)

東京市芝區久保町十一番地
東京市芝區富士見町六丁目十六番地

印刷所 金子活版所

印刷者 小宮山信好
發行者 橋松久次郎

東京市牛込區矢來町三番地

東京市芝區久保町十一番地

明治二十二年十二月九日 内務省許可
明治三十四年十一月九日第三種郵便物認可